いしかり暦

石狩の冬－昭和初期から同三十年代前半まで……田中　實　1

冬の年中行事……駒井　秀子　15

むかしの冬の憶い出……青木　隆　19

石狩川治水工事と生振治水市街地……吉野　惣栄　25

第　10　号

1991．7月

石狩町郷土研究会

石狩の冬―昭和初期から同三十年代前半まで

田中　實編著

序に代えて

「札幌の一月は氷点下十度以下の日が一日もなく、一八八六年（明治十九年）の観測以来初めての記録となった」と、本年二月四日付の「北海道新聞」は、一月の暖冬を報じている。その後、二月に入って札幌市は平年を上廻る多雪となったが、次いで二十日には最低気温が零下十六度（平年比マイナス八度）という今冬最低の凍れを迎えた。それでも月平均すると暖冬の二月で終った。このことが今関心を高めている地球の温暖化と結び付くのかどうかは分からない。

石狩に二代・三代にわたって住んでこられた高齢者に尋ねると、「昔の冬は―私の若い時代は―もっともっと寒かった。比べものにならない。雪も多かったし―」と言われる。気象統計書を調べると、大正九年から昭和五年、同十五年から二十三年頃の冬の北海道平均気温は、低いが、その後は、平均以上の暖冬の年が多いことが分かった。積雪量も特別多かった年は少い。

といって前記の「酷寒多雪であった」との交交の談話を軽々に判断することは慎まねばならない。何故なら、私たちは、当時に比べて生活環境や社会環境が著しく良くなって、昭和三十年代頃までの耐冬から、利冬、楽冬の現代を享受しているからである。高齢者の回想もこの影響を受けているだろうが、採録者としては先ず談話を肯定的に受けとめ、その周辺（背景）資料を研究し実証に務めるべきであろうと思う。現在の私たちの感覚や思念をもって、採録すべき当時を云々することは自戒してかかるべきであろう―と云ってもそれはきわめて難しいことではあるが―。

そこで、当時の石狩の冬についての資料を探索したが、戦災により全焼した町庁舎には戦前の公文書や資料は皆無、元公職者にそれを求めても意に満たない。古老からの採録も、昭和初期に的を絞れば七十代後半以上の方々なので諸制約が多い。私の手元資料は断片的、記憶では時代も下廻る。

あぐねた末に、石狩町誌編集資料の一つとして収集しておった戦前の『北海タイムス』紙の石狩関係記事（コピー）を借用し、石狩の冬に係わるものの一部を抄出したのが第一章である。冒頭の佐野氏のルポ記事をはじめ取材記事および生振・花畔・石狩からの通信記事の短行など、当時の石狩の冬を活写している数々には刮目させられた。

そして、石狩の冬は厳しく、耐寒、耐雪、冬籠りの諸環境であったことを実感し合点することができた。新聞の資料価値について大いに啓発もさせられた。

また、当時の石狩本町での購読が多かった（私の家でも購読）『小樽新聞』も読まねばとの意欲が強まったことが、私事ではあるが私には収穫であった。

第二章は、戦後の北海道の除雪方法（機械による）研究・実地試験の先触れとして、テストロードに当町の石狩街道が使われたこともあり、当時から関心をもち写真も撮っていたので、この機会に参

考文献からの引用も含めてまとめたものである。最後に、文中使用させて戴いた北海道新聞社、各参考文献の著者・発行所の各位に深甚の謝意を表する。

附記　1、第一章は転載なので一重カギ（「」）は除した。仮名遣いは原文のままに従った。
2、第一章記事の参考のため編著者が註解を附した。
3、第二章の『重カギ（『』）は文献の引用部分である。

第一章

『北海タイムス』紙に読む石狩の冬－昭和二年から同十八年まで－

昭和二年二月三日

村から里へ　吹雪を趁ふて

砂洲に立つ石狩燈台　吹雪に通ふ看守の子

（一）

石狩町の雪は深い。雪の捨場に困り道の東、商店街を一間程きれいに除けて通路を作ってあるが、西側三間は積み上げた雪が一丈餘、見えるのは屋根だけ、門口から道路へ雪を切り開いて出入りしている様は洞窟其儘である午後三時、一時晴れた空が再び曇って来た。粉雪がちらり／＼落ちてくる。風となるらしい。『燈臺へ行くんですか、ひどいですよ』と案じてくれる宿の主人の聲に送られて、街端れから五百間砂洲に立つ石狩燈台へ向ふ。渡船場の小舟は學校帰りの子供を乗せて今出ようとしてゐる。川向ひから河の中頃まで一帯の河水の結氷、結氷の端に渡舟待つ人が粉雪を浴びてぽつんと立ってゐる。雪の塊り、三疊五疊もあるかと思はれる薄氷を乗せて河水は音もなく流れてゐる。

渡船場から河に沿ふて二町を歩む、人家は盡きた。ひゅうと唸った北風が左の頬を刺す。猛烈な吹雪だ。平原と見まがふ雪の砂洲、河口に狂ふ風の中、遥に置かれた燈臺の姿は淋しい。道は？亂舞する雪煙の下、棒杭とよしきりを三尺位の間をおき道しるべに立てゝある。

西北の方、砂丘の上は暗黒の空、河口に渦巻く悪氣流の為か、丘の彼方から吹き上がる暗黒の雲が中空でぱっと二つに割れては上下左右にもつれ合い何處ともなく消えてゆく、消ゆるところ上層にくすんだ黄色の薄雲が低迷している。よしきりを辿って道を急ぐ。ごうッごうッと波の音が近くなる。砂丘も消えた。雲と共に砂洲を蔽ひつぶすが如く砕けては寄せる日本海の荒波、紫暗、暗緑、どす黒い水、折返す波頭が後から後からと白沫あげて狂ってくる。あまりの凄惨に顔をそむけてくるりと右を向く、道は河端十間を走ってゐる。水の淀むところ流氷が押合ひ無氣味な音を立ててゐる。雪面を這ふが如くに雪煙が河岸へ飛んでゆく、振返る彼方にあるかなきかの砂洲の小道を、子供か小さな影が二つ抱合ふ様に動いて来る。勇を鼓して燈臺に走った。高さ四十尺圓形の燈臺に衝る風は激しい音を立てゝゐる。板戸をぴったりと閉めた住宅に轉ぶやうに駈込んで

漸く蘇生の思ひをした。

此の燈臺に河と海とを夜つびて守る燈臺看守の一家が殆ど交通を絶たれて生活してゐるのである。看守長は山崎一郎さん(四七)おかみさんのキエさん(三九)次女の文子さん(一七)次男の武夫さん(一三)、獨身の看守大槻留五郎さん(一五)に小使小枝佐吉さん(五六)の一家四人凍える手をだるまにくるんで吹き捲くる吹雪に帰ってきた可憐な子供は文子さん武夫さん兄妹であった。(此の項續く)(寫眞は燈台、佐野生)

昭和二年二月四日
村から里へ　吹雪を趁うて
午後六時半零下七度　終夜此の室に灯を守る

(三)

風に交って浪音が住宅の壁を打って響いて来る。大槻さんは點火の準備に忙しい。小使がランプの用意をしだした。

十数町の石狩町は電燈がまたゝいているが此家ばかりは昔ながらのランプの光り、電線をひくに千圓を要するさうである。赤々と燃えるストーヴの傍に三毛猫が一匹所在なさそうにうづくまってゐる。米を二俵積み重ねた壁に寄沿うて武夫さんが學科の復習に餘念がない。

犬吠崎、福島縣の鹽谷岬、函館のカットシ岬、宗谷、壽都の辯慶岬、奥尻島の稲穂、丹後の宮津、下の關の臺場ヶ原、佐世保附近の古色島、小樽の祝津、再び宗谷、樺太の西海岸宗仁、それから昨年の六月石狩へと日本海岸を一巡り三十年以上の燈臺看守の生活を續けて来た山崎さんは淋しさに馴れ切ったか平和な色が顔に漂っている。結婚したのはキエさんが十九の娘盛り、北海の孤島奥尻の稲穂燈臺へ輿入りしたのである。

『淋しいとは思ひませんでした』と語る其の微笑の影に何かしら敬虔な人生觀が潜んでゐるやうに思はれて目頭が自然に熱くなって来た。

文子さんは丹後で武夫さんは臺場ヶ原で、今樽中に在學中の長男英一さん、豊原高女三年生寄宿生活をしてゐる長女の綾子さん(一八)は共に稲穂岬で産聲をあげたのである。

『この燈臺は楽な方です。村から半里もある崖の上の燈臺は學校に通ふのが可愛そうで、退け時に夫婦二人で迎へに行き先に立って燈臺へ急ぐ子供の後姿を眺めては共に涙にくれました。今では子供達も馴れましたか一人で友がなくとも暮してゐます』。三毛猫を膝にのせて何かを考え込んでゐるやうな文子さんと武夫さんに『淋しくないの?』と言葉をかけたが二人はにっこりわらったゞけである。五分芯のランプがほの暗い影を壁に投げている。

『私なんぞこゝへ来てから石狩の街へまだ二度しか行って見ませんワ、夏は参觀人が随分来ますが冬はもう誰力もいらっしゃいません』。冬の燈臺に想ひを走らせる人は幾人あることか。大槻さんが『火が入りました』と知らせに来た。

丁度五時半。山崎さんに案内されて長い廊下を渡ってゆく。眞っ暗だ。圓形の壁に沿うて鐵の廻り梯子がついてゐる。手すりを握る左手が凍えるやうだ。二階三階四階とぐる〳〵巡って灯の前に漸く出た。其の瞬間一種の幻想の渦巻に捲きこまれてしまった。

徑一間半の圓い室、海に面した半面は三尺に四尺の硝子が四枚角度をなして貼ってある。半面はペンキ塗りの鐵板の壁、十八燭の石油ランプを中心に巨大なプリズムの怪物がゆるやかに廻轉してゐる。

肋骨状にとりまくいくつものプリズムの面が冷い光りを反射して寒い此の室を底知れぬ寒さの淵に陥し入れる。中央のレンズが眼の前に現れるや三千燭の強光が鋭く眼を射て卒倒しそうである。四枚の硝子に怪物の様な發光機が各違った姿を映し出し硝子面を流れるやうに變動する。廻轉を調節する緩急器のカタ〳〵クルクルと響く音の反響も淋しい。またゝく間に硝子が氷る。

山崎さんはリンリンを塗って融かした。海も空も唯まっ暗、風の音、浪の音、緩急器の音が此の幻想を深刻にしてゆく。高さ四十尺、北風のまっ只中に立つ此の一室は午後六時半寒暖計は零下七度を示してゐる。火氣は絶對に用ひられない。山崎さん大槻さんは二時間交替に終夜此の奇怪な一室で夜を明かすのであった。（寫眞は右から文子さん綾子さん武夫さん）（佐野生）

註解　1石狩本町の電燈は、大正八年（一九一九年）点じた。
2昭和二年六月一日　石狩燈台の光源が電灯となり、閃光も変る。
三〇〇ワット・六、五〇〇燭光、第六等閃光白色、二〇秒毎に閃光。
3昭和四十年（一九六五）四月一日　自動化（無人）となる。

昭和二年二月六日
村から里へ　吹雪を趁うて
海抜四百尺石狩油田の夜は零下二十三度

（五）

廿九日の朝は寒暖計がぐっと下った。石狩川はきのふ舟を入れた氷の間が五分の結氷、発動機船を乗合衆がぐら〳〵揺がしながら此の氷へ突き入れ何回となく繰返して漸く三寸の結氷箇所に船を着けた。

川を渡って午前十時三里の山奥高さ四百尺の日本石油株式会社石狩油田八ノ澤へ向ふ。札幌かへりの社員西村氏と幌なしの箱馬橇を驅り平原を二里、五ノ澤から一里、澤道を傳って、十数臺の油田行きの馬橇の後から山へ進む。後から五ノ澤のあねさまやおっか達が角巻かぶって二十数名列を為して續いてくる。

『早く行かねば兵隊さんアえってしまふ』と此の日八澤油田を通過する七師団のスキー隊を見にゆくのである。兵隊さんを見るも珍しい此の山は午後二時三百四十名のスキー隊迎へるや、赤ん坊を背負ふた坑夫のおかみが『おれアハー轉んでしまってア』と山また山、坂また坂の社宅から黒山の様に集り會社からみかんキャラメルを御馳走になる兵隊さんを取巻いて大騒ぎであった。

八ノ澤の頂きから見る春別礦は谷底から山の頂きにかけて四十三の油井の櫓が雪の中に林立してゐる。

坑夫が百五十名社員が十名、夫婦者の社宅が三十五戸春別には妻を残して出稼ぎの短期の獨身者やらほんものゝ獨身者の長屋が二棟、近くて二町遠くは十町を隔てゝ建っている。

海抜四百尺石油礦山の夜は寒い。部屋部屋にはお手のものゝ石油瓦斯ストーブが夜通し燃えてゐるが午前零時と午後零時交替で働く人々の苦勞は並大抵ではない。廿九日夜は零下廿三度の寒さ、掘鑿井採油井共に火氣は燈台と等しく絶對に禁止されてゐる。四百間を掘り下る徑八吋長さ二間の鐵管を上下させる發動機の音がガランとした小屋内に響いて居る。夜が来た。山のそこ、ここ電燈が淡い光を投げてゐる。鍛冶工場の發動機が峯を越して春別まで響いて来る。獨身者の一室三十二疊に十三人が瓦斯ストーブをとり巻いて雑談に耽る。講談倶樂部、落語雑誌に寝そべって讀みいる者、尺八に遠い故里の想ひ出を籠めて吹く若者、油田の夜は静寂そのものである。

向ふの長屋から越後獅子を彈くマンドリンの音が流れてくる。社員になる迄の間實地研究の幾年かを過す中學卒業生辰さんの調べである。

五ノ澤から登って来る豆腐屋のアブラゲ豆腐、午勞が食膳を賑はすが今年から始められた購買には罐詰類が待ってゐる。城生所長、社員の西村西田氏等の獵名手が澤を下って兎狩に、時折は兎鍋が油田の夕膳を飾る。

坑夫の子供は澤道を一里五ノ澤の學校へ通ふそうだが吹雪の日は坑夫が附添ひ一隊をなして漸く往復する。

今年は山の上に特別教授場を設けて村山といふ越後の國から来たスキーの名人である若い先生が四年までの生徒を教授してゐる。

卅日の十時頃猛烈な吹雪がやって来たが全山電燈に包まれて眼に何物も入らなかった。（寫眞は雪の八ノ澤油田－佐野生）

註解　1　日本石油株式会社五ノ沢鉱業所の産油量最盛期は昭和二年（八、〇七五キロリットル）から昭和七年。昭和二年の新油井掘さくは十六坑。所長は城生義一。

2　昭和二年に山元から八幡町まで専用のガソリン軌道が敷設され、資材等輸送の便が図られた。

3　昭和三十五年　石油及び天然ガスの採掘を廃止。五十八年間の歴史を閉じた。

昭和二年二月九日

雪の村から雪の里へ

生振村の農家へ倒れる様に轉がり込んで

（六）

卅日油田から石狩迄三里を吹雪いた大吹雪は卅一日朝漸く静まったが、午前十一時頃再び盛返して来た。石狩から街道三線まで一里の道は全く消えてしまった。行き違った行商人の足跡は一町にして埋まり二尺三寸の膝までぬかりながらふら〳〵と歩を運ぶ。三線か

ら河岸へ四町ここでもよしきりを頼りに雪をこぐ、結氷した石狩川の上斜に渡って立てられた柴も役立たず顔を打つ雪に面を向けて一町半をぬかりながら渡りつめ生振村の農家へ倒れるやうに轉げ込んで蘇生のおもいをした。

折戸を開けた土間に河の寄木の薪が積んである。又一度戸を開けると闇の様な廣い土間、燕麦の俵が三十俵程黄色く光って煤に汚れた天井裏へ届く程重ねてある。幅四尺長さ一間の爐には丸太の先が燻りながらもえてゐる。『あだなさい（暖まりなさい）』というおっかの言葉に爐に足を突き込んで火を抱へた。疊とて無い、板の上に擴げられた筵と僅な莫座（ござ）、おっかは破れた着物でべったり座り足袋を刺子にする為にせっせと針を運んでゐる。七つばかりの男の子、もんぺをはいて頬冠り横に寝たまゝ五つ位の女の子と馬鹿口きいてはゝしゃいでゐる。『だるまさんだるまさん、にらめっこしましょ、アップップ』。赤ん坊が泣き出した。野菜篭が揺籠煤けた屏風を廻して風を除けてゐるが屋根を支へる柱が眞ん中にあるだけ、片隅に神棚、壁に沿ふて鍋、醤油瓶がずらりと列んで二十疊近い大廣間而も唯一つの此家の部屋はがらん洞である。

『冬がんす、俵こさえたりさんばやしこさえだり、あどア唯あそんでゐるんだハイ』と吹雪に閉ぢ籠められた農家のおかみは物いふもだるそうに口を動かす。

子供達は古びた下駄に赤いメリンスの布でぐる〳〵輪を掛け脱ぎ棄てた足袋をはかして遊んでゐる。

『遊んで、餅くって腹の皮餅みだェに　ぷっとふくれるせェ』

『餓鬼生れゝばくは（食）せる畑物あるし、しんぺねェーや』と哄笑した茨戸馬橇待合所の若者の話を想ひ出した。

晴れ間に飛び出して途中寄ったやゝ裕福な農家の牛小屋冬中寝て食ふ牛としみの上におかれた明笛を見た時退屈であらふと思はるゝが秋のとり入れをすましてほっと一息、雪が融け黒土が顔を見せてくれる春来る日を待つ農家は人間の冬眠である。（佐野生）

昭和二年一月三一日

生振地方　積雪四尺　交通杜絶す

生振地方は二十二日来約四尺の大降雪にて郵便物は三四日の停滞を来し人馬の交通殆ど絶えたる有様にて目下部落總出にて道路の雪踏みを行ひつゝあれば近日人馬の交通出来得るならんと。

昭和二年二月九日

生振　本村一帯は寒明後連日の吹雪で交通杜絶郵便物新聞等は卅一日以来不通となり近年稀なる吹雪である。

昭和二年三月二〇日

生振　石狩川茨戸渡船場氷橋は二十五日頃迄人馬の通行が出来る見込。

昭和二年四月七日

花畔樽川氾濫　畑地一面は大海原

石狩町花畔地方は兩三日前から急に融雪したので畑一面は大海原と化し深さ五尺餘あり、樽川方面からは濁流物凄く押寄せたために團體組部落は床上に浸水し牛馬は腹部まで水中に没し大騒ぎとなり既に五六戸は市街地の高臺に立退いたが、斯かる大洪水は稀であるが花畔治水工場が設置されて以来十数年間融雪に苦むに至ったもので同工場では唯一の雪融け水を排除する運河の川口を堰止めて揚水機を設置した結果で部落民はこれが撤廃方を望んでゐるが雪解け水排除の遅速は實に本年度の作柄に影響するものであって生活上に不安を招来する重大問題といはれて、（後略）

註解　1　明治四十三年九月北海道庁の石狩川治水事務所花畔工場（現在の花川小学校西隣）が設置され、石狩川護岸工事用鉄筋コンクリート単床を製造した。同工場は、花畔銭函間排水運河（明治三十年完成・延長約十二粁）に水門をつけ、水車による発電を行なった。

2　団体組は、花畔北十一線から北八線の現国道二三一号の西側に位置していた。太平洋戦争後も、「上団体」「中団体」「下団体」の三組合があった。

昭和二年一二月四日

花畔地方は物凄い荒れ　児童吹飛さる

〔花畔電話〕　石狩花畔地方は三日午前八時半頃大暴風雨襲来し約四時間猛烈に吹き荒して雪と變じたが屋根は吹き飛ばされ電柱は倒れ電話線は切断　雪圍ゐは全部破壊されるといふ物凄い光景を呈した。折柄通学中の花川校児童五名は附近の排水溝に吹き落され危いところを助けられ又通行の車馬が危ふく石狩川に吹き飛ばされるところであった。石狩聯絡船五月丸は航行不能となりオタベリ岬以南の乗客を上陸せしめ又生振治水工事場人夫長屋一棟倒壊一棟半壊したが人畜には死傷なかった。

昭和二年一二月四日

石狩町では浸水家屋十数戸

今猶ほ猛威を揮ひ　半壊家屋もある

〔石狩電話〕　石狩地方は三日午前五時頃より西風の暴風となり市街の家屋の屋根は吹き飛ばされるもの多く吉田長助方は遂に半壊し各商店の看板は吹き落され、また石狩電燈會社散宿所の塀は殆ど倒壊するなど風はます〳〵猛威を揮ひ然も此の風のため石狩川は汐（しほ）が上り河水氾濫し船場所道路まで浸水し岸に繋がれた舟が道路の中を流れ歩き為に交通全く絶え田中松次郎氏其他十数戸の浸水家屋を出だし大騒ぎを演じ石狩消防組では林組長以下一部二部の組合員總出で警戒しつゝあり、尚磯舟の流失したるも相當多く其被害高は多額に上る見込である。（三日午後五時記）

昭和二年一二月二三日

大あらしのあと　石狩川氾濫し　通信全く絶ゆ

石狩町附近の大暴風

〔石狩電話〕　石狩町附近は二十一日午前十時頃より西北の大暴風となり石狩川は氾濫し河水は堤防を越え船場町通り渡船場附近より神田忠蔵宅間の道路に浸出し船は道路の中を流れ行く有様で交通全く絶え流出破壊せる磯舟等多数あり　市内の屋根看板等は大半吹き飛ばされ被害の大なるものは親船町通り家中（やなか）、紺野、山谷、渡邊各商店　金龍寺、石狩小學校等で各校生徒は教員引率の下に戻った。午後六時頃に至り風は稍平穏となったが之が為電信電話は故障を生じ通信全く杜絶え電燈も断線し一面暗黒の世界となった。

昭和二年一二月二三日

〔石狩電話〕　去る十八日石狩町繋船場に於て沈没せる石狩、茨戸間定期聯絡船さつき丸（二二噸）は其後引揚作業中の處二十日午後三時頃引揚げを了した。船體に二個所の大破損があり其處から浸水沈没せるものらしい。

註解　皐月丸（さつき丸）は、大正十五年八月十四日から茨戸－石狩間の定期連絡船として就航した新造客船。就航は毎日二往復。

昭和二年一二月二三日

〔石狩電話〕　石狩町町會議員靜岡勝太郎氏は二十一日午後一時頃同町字高岡村で折柄吹雪の為行倒れ苦悶し居るを石狩郵便局集配人船水助蔵が發見附近民家に収容應急手當の結果漸く生命を取りとめた。

註解　靜岡は、藤岡の誤記。

昭和三年一月七日

花畔地方大吹雪　電話線は切断され

製麻會社の倉庫倒壊

〔花畔電話〕　石狩花畔地方は十二日朝から大雪降りにて三尺餘の積雪を見たが午後二時頃から俄に西北の強風に變じて大吹雪となり道路は見る間に十数尺の雪溜りが出来て交通全く杜絶するに至り十三日は札幌並に石狩の逓送夫は花畔局に到達せず篠路方面の電話切断のため其消息を知るを得ないが二、三日中開通の見込たゝない。尚百餘坪の製麻會社亞麻倉庫は突風のため屋根を石狩川に吹き飛ばされ滅茶々々に倒壊した。

註解　一月十一日本道に暴風襲来し、壽都では漁船沈没で死者三十三名、行方不明者八十名の大惨事があった。

昭和四年四月一九日

濁流物凄く花畔地方の大増水

農家の被害は甚大　部落民雪割に従事す

石狩町花畔地方は一時に融雪を見て畑一帯は青海原と化し樽川地方から押し寄せる濁流は物凄く家屋は床上一尺五寸に及び激流は北八線石狩街道に流れて交通杜絶の状態である。樽川小学校は浸水して辛うじて授業を繼續しつゝあり　部落民は下水の堀り下等に徹宵努力しつゝあるが数年に見ざる大融水であって秋蒔き作物の腐敗は免れざるべく其被害甚大で農家は氣を揉んでゐる　十六日は朝から樽川花畔關係部落民、總動員の下に新岡駐在巡査指揮して運河の雪割に従事したが花畔十一線組合からは焚出しをして激勵したが遂に橋梁一箇所は押流された。目下浸水家屋五十餘戸床上に及んだもの二十数戸あり刻々と増水しつゝあり一般農民は非常なる不安に驅られてゐる。

註解　昭和四年一月から三月にかけて大雪が続き、とくに、一月の大雪は明治十二年以来の大雪で平年の三倍に達した。

昭和五年一二月六日

石狩河の眞っただ中で氷ぜめ雪ぜめ九時間

救助隊約一町の結氷を砕いて危い一命を救はる

石狩町花畔地方は四日朝から未曾有の大吹雪と化し交通杜絶したが午前七時頃札幌軌道會社船頭本籍秋田縣山本郡常盤村現住所石狩郡花畔市街地飯坂時三郎（二六）は同僚幸坂謙次（三二）と共に石狩川花畔渡船場にて艀に乗じ積荷作業中折柄の暴風雪に吹き飛ばされ飯坂は船に乗った儘流氷と共に約一里程押流され氷の中に閉ぢ込められて仕舞ったので如何ともなし難く只凍死を待つのみとなり、一方川岸にゐた幸坂は磯船で一生懸命に救助すべく努力したが意の如くならず遂に花畔郵便局に引返し電話で石狩のサッキ丸外一船に救ひを求めたがこれ亦氷の為航行出来ずとの事なので止むなく幸坂は午後二時花畔自警團に救助を求めたので直に出勤し、外に小松田飯場幹部札幌軌道會社からは深井驛長が人夫十数名をつれて救助に来り約百名が現場に向ったが川の中で氷攻めとなって居るのと吹雪の為手の下し様がなく傍観するのみであったが水泳の達者な花畔駐在巡査新岡善六（二六）五十嵐三次郎（二一）梅澤力（一九）藤田富蔵（四六）及前記幸坂の五名は水産組合のモーターに乗込万難を排して氷を砕く事約六十間（けん）に及び辛うじて午後五時救助したが、飯坂は九時間近く氷の中にいた為凍傷の氣味であるが幸ひ元氣で九死に一生を得たと喜んでゐたが救助に向った前記五名は人命救助で長官に表彰方を申請した。

昭和六年一月三日

人馬もろとも雪に埋もれる

人夫が駈付け掘出す　石狩地方の吹雪

石狩町は舊臘三十日以来俄然大吹雪と化し殆ど交通杜絶の状態であったが石狩郵便局逓送手直江増太郎は馬橇で三十一日午前二時石狩を發し花畔に向って猛烈なる吹雪と十数尺の吹溜と闘って通行中花畔を去る十餘町の花畔神社附近に差し蒐（かゝ）った個所で人も馬も空腹と疲労のため遂に行き倒れとなり雪中に埋められてしまった。急報により花畔郵便局員外人夫十数人駈付け雪中から掘り出し危うい一命を取止めたが為に一號郵便は五時間の遅着となり却々（なかなか）の大騒ぎであった。

註解　このあと、昭和十二年から父子二代にわたり十二月から四月まで馬橇による逓送業務を請け負ってきた三上昇之助氏（親船町居住）時代の同三十五年当時は、午前三時四十五分に石狩発、札幌中央郵便局着十時、同出発は十時半。石狩帰着は午後四時四十五分。町内配達は翌日。なお、五十五年間続いてきた郵便馬橇が、郵便車に代ったのは同三十六年である。

参考文献　「北海道新聞」昭和三十五年三月六日付。

昭和六年一二月一六日

石油も買へずにまっくらな農家　石狩花畔地方の惨状

毎年歳晩を賑はす石狩川の鮭漁は此頃はめっきり不漁となり當業者は勿論石狩市街地は火の消えた如き不況を呈し商店の貸出しも出澁り重大化しつゝあり、又、飢餓線上を彷徨している農村は是又凶作に悩まされ殊に花畔地方はランプを燈す石油の購入も出来ず毎夜無燈火にて寒さに凍えている農家もあり一般は本春拓銀から借入れた肥料資金、年賦金等の拂込が出来ないで嘆願書を提出する等極度に疲弊困憊してゐる。これが救済事業を起すことになっているが本年中には物にならぬ模様であり一日も早く實現方を町理事者に希望すると共に一方産業組合の蹶起を促しこれが善後策を速かに講じてどん底にある農家の救済を希望してゐる。

註解　1　前年の昭和五年八月に、花畔土功組合が設立され、同地区の造田事業が着工された。このため組合員の負担金支出が増えた。

2　昭和六年六月から八月にかけ低温。このため稲作は全道的に大凶作で産米は百八万石（前年は三百十七万石）に過ぎず、本道及び東北地方は大飢饉となった。また、北海道の失業者は年末で三万人以上。（『新北海道史年表』昭和四五年、奥山亮著、みやま書店を参照）

昭和一一年一月二〇日

白魔の亂舞熄まず

家屋の埋没　花畔地方窓から出入

石狩町花畔地方は昨冬以来雪が尠く又本年も凶作でないかと神経を尖らせてゐた矢先、十四日からどっと大吹雪襲来して、市街地は

丈餘の吹き溜りで、家屋は埋没して空窓から這ひ出したと云ふ惨状振りで農作の前兆も程度を越した感がある。篠路、花畔、石狩間の各郵便逓送はこの頃やうやく十数名の人夫が背負って辛うじて通じたが十八日に至るも、降雪はやまず、自警団総出動して除雪作業に奉仕したが馬橇の開通は見當がつかない。

昭和一八年一二月一二日

修練所生の敢闘　バス路線の除雪奉仕

札幌観江バスは数日前から吹溜りのため花畔－石狩間は運轉休止してゐたが石狩健民修練所入所生四十餘名は八日大詔奉戴記念日に敢闘精神を発揮して総出動し二日間に亘って花畔、石狩間二里半の除雪作業を奉仕し、九日午後便から運行開始したのでこの行動は一般から感謝されてゐる。

第二章

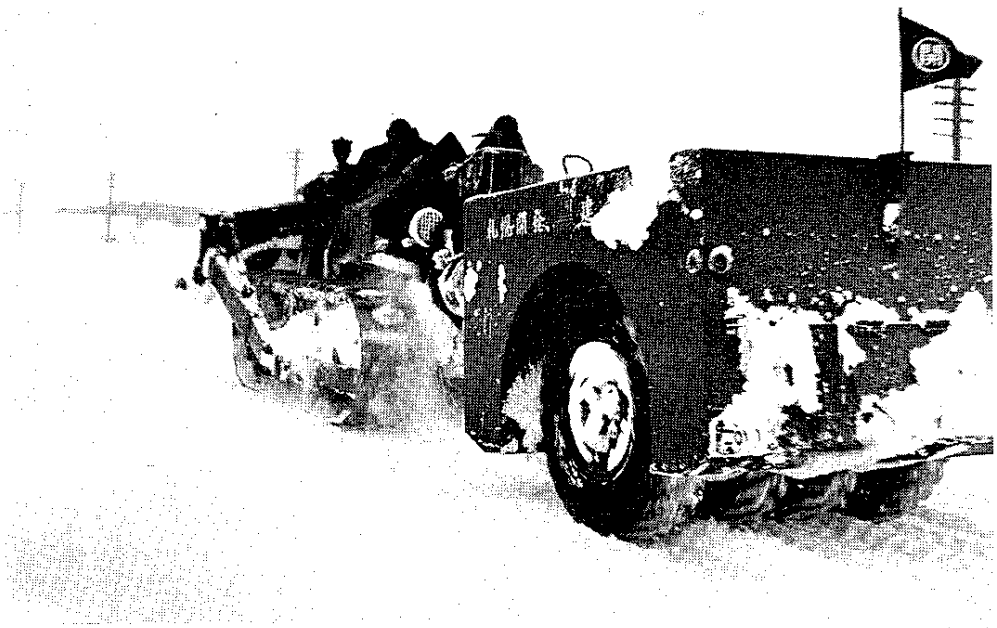
昭和二十年代から同三十年代前半までの

石狩の冬－花畔間の冬季間旅客輸送

昭和二十年代になっても、馬橇が唯一の旅客及び貨物輸送手段であった。バスが石狩市街の終点まで運行するのは、融雪の状態にもよるが四月に入ってからのことが多かった。しかし、二十年代の石狩港は鰊の荷揚地で賑わっており、食糧難の当時に於ては速かに札幌市に搬送しなければならなかった。このため、二十二年の三月に、石狩町漁業会、北海道中央乗合自動車㈱会社（二十四年六月から北海道中央バス㈱会社と改称）等の関係者によって、札幌－石狩間の除雪が実施（以後毎年実施）されたことにより、大型バスの運行もそのお蔭を受け早まった。といっても、当時石狩本町市街は除雪されていないので、バスは市街入口までの運行であり、終点まで入ったのは三十年になってからであった。

二十八年五月に準地方道札幌－留萌線が二級国道二三一号に指定されたが、「石狩－花畔間の道路は両側の路肩より低いために、石狩湾から襲ってくる雪や地吹雪ですぐ埋まり、雪溜りが処々に生ずる状態は変らなかった。北海道中央バス㈱会社（以下「中央バス㈱会社」と記述）札幌地方営業部は札幌市、石狩町、石狩漁業協同組合などと協力して春先の雪割りに力を入れ、バスの運行を確保する

とともに、札幌市民に新鮮な鰊を供給するのにも大きな役割を果した」。



「ＢＢⅢアングルドーザーとＨＲ10型タイヤ・ローラー」による試験圧雪の状景／昭和30年／田中實撮影／同人所蔵資料

一方、北海道開発局札幌開発建設部は、「二十八年十二月一日から翌年二月二十七日まで、札幌市郊外で、圧雪の試験を実施した。この延長は九粁であった。それは、ブルトーザーＤ50とトラクターＴ・Ｄ・9にタイヤーローラをけん引させたのである。タイヤーローラの重量は、六トンから始め、雪の固結するにつれて八～十トンまで漸増していった。十トントラクターのけん引可能限界の積雪深は、大体四十センチメートルであった。

転圧は原則として、毎日午前と午後に、一往復ずつだった。しかし、長時間降雪時に充分な効果をあげるのには、二粁に一台の割で、ローラーを配置しなければならなかったし、融雪期には、全然効果がなくなるなど多くの問題が残された。」（註　部分引用）

この圧雪試験は、花畔－石狩間で実施され、その写真を編著者が撮写している。

また、この圧雪試験を注視していた中央バス㈱会社は、「造材運搬用の『バチ』と称する一種の馬ソリを車輪代りに使い、その上に札幌整備工場で製作した簡易ボデーを乗せた約二十人乗りのバス」を旧陸軍の九五式軽戦車でけん引し、「あらかじめ開建のタイヤーローラーを使ってて・・ん・・圧した道路」を走らせ、乗客や荷物を運ぶこととした。

そして、二十九年十二月二十三日に中央バス㈱会社の雪上バスの試運転を行ったが、雪が少なくて石狩行を中止し、試験運行は翌年に延期された。

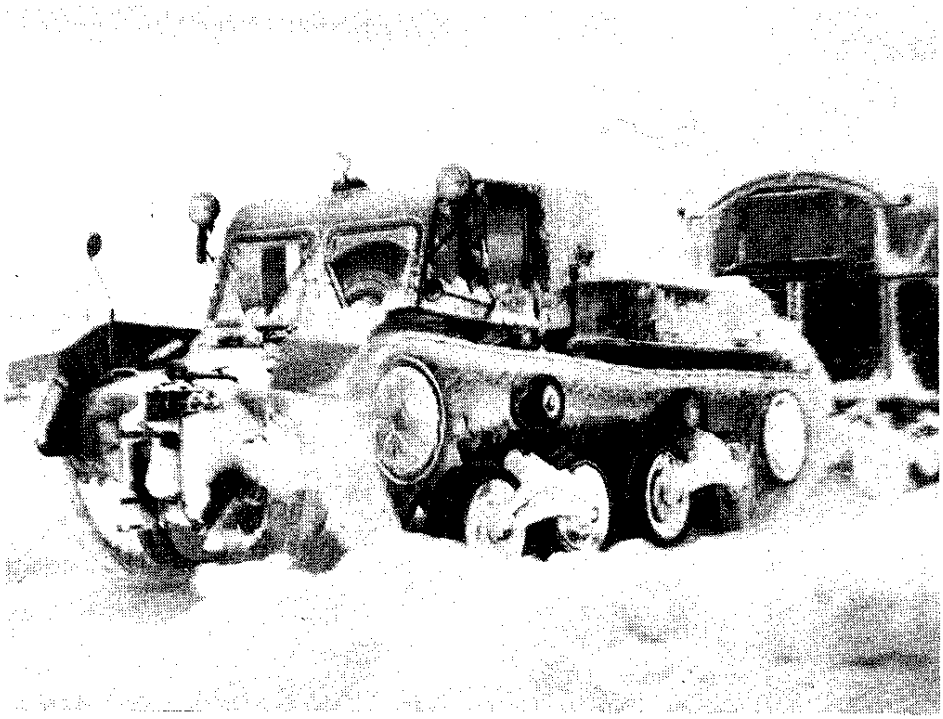
なお、けん引に使用した九五式軽戦車は、昭和十年に制式決定された旧陸軍の主力軽戦車で、戦争中は、十四年のノモンハン事件の初出動から、太平洋戦争中は南方各方面の戦闘で活躍した戦歴をもっており、エンジンは百二十馬力空冷ディーゼル・エンジンで、重量は七・四トン。最高速度は時速四十粁などの性能であったといわれる。

この雪上バスは、前述の札幌開発建設部による圧雪調査結果や、試運転の結果をもととして改良され、翌冬の石狩線花畔－石狩間運行に登場したのである。

この雪上バスについて、昭和三十一年二月二十三日付の『北海道新聞』は連載の「ひとこと」で、次のように報じております。

そりバス　中央バス運転手　鹿島武雄さん

「雪が積ったからといって路線を休止してしまっては、せっかく利用するお客さんにいろいろ迷惑をかけるばかりでなく、私どもの会社としてもやはり営業した方がよいので、ことしから石狩線のうち石狩－花畔間に限って雪上車をはじめて運転してみましたが、どうやら好評のようでホッとしています。石狩管内だけでも現在、浜益線、厚田線、新篠津線（江別－新篠津間）が雪のため休止しており、石狩－花畔間もあやふく休止の憂目に会いました。ところが雪上車を運転して休止させまいという構想が昨年から練られ、昨年のテストの結果を参考にしてキャタピラを拡げたり、積雪を割らずに踏み固めたりしてさる一月十六日から運行し出したもので、丁度一ヵ月ばかりを経たわけです。



昭和30年頃、石狩本町－花畔間の旅客輸送に出動した雪上車／昭和30年／田中實撮影／同人所蔵資料

むかしの戦車を改造したけん引車に定員二十五名の座席のついた客車をつけたトレーラーのようなもので、この客車には前後にそり

がついており、土地の人は〝そりバス〟と呼んでいますが、時速十八～二十キロぐらいで走っています。吹きたまりの多いデコボコ道なのでシャクられることがあり、船に乗っているように酔う人もなかにはありますが、昨年末まで冬になると二里半もの道を吹雪にさらされながら歩いていたので大いに感謝されています。来年は厚田線もと会社側では考えているようです。

―幌向村出身。トラックの運転手から二十七年中央バスに転向。三十歳。―」

この通称「そりバス」に数回乗った経験があるが、客車の窓は雪煙りで外がよく見えず、車内は暗くて寒かった。そして、新聞記事のとおり圧雪した道路の吹きだまりに差しかかると、スピードが変りその度にガクンガクンと強くシャクられるのには、車内の暗さと換気の悪さも加わって酔わないまでも気分が悪かったことを覚えている。しかし、客馬橇くらべて早く、地吹雪にさらされたり、転覆することもなかったので利用者には喜ばれた。

花畔―石狩間は五往復。料金は百五十円位であったと思われる。というのは、この「そりバス」に先立って前年十二月末から石狩―花畔間を運行していた馬橇（石狩本町の二業者で六台、毎日八往復、前年の料金は百円）の一業者が、今年雪上バスが百五十円位の料金をとると伝えられていたので、バス並の百五十円に価上げをしたために、利用者の悪評を買うことになったことなどの同新聞（二月）からも知ることができよう。

雪上バスと馬橇の競合により石狩―花畔間の冬季交通は便利さを増したが、雪上バスは、吹雪で視界のきかない日にはすぐ運休したので、客は馬橇（乗員四名位）に集まり、あふれた人は歩かねばならないことも少なくなかった。

三十一年冬（十二月）からの雪上バスは、客車は三十人乗りに改造され、暖房付きとなった。馬橇も客馬橇組合を作り料金を統一して運行した。そして、吹雪の時には雪上車の運休が連日続いて、客は花畔から札幌に引き返したり、馬橇で寒さに震えながら、なんとか石狩まで通行するという状態が十二月から翌年三月まで続いていたのであった。しかし『三十一年一月に石狩町議会に交通委員会（委員長、堀江友平）が設置され、町とともに石狩―花畔間の国道土盛工事について、北海道開発局はじめ関係機関へ猛運動を展開したこともあって、同年夏から花畔二線―六線間の部分改良工事（延長約一・八粁、巾六・五メートル、高さ一・〇五メートルの土盛工事）に着手され、三十二年まで継続実施された。この工事は例年吹きだまりとなる部分を高くして積る雪を風で吹き飛ばすのが目的であった。

この土盛工事とブルトーザー三台による茨戸―石狩間の常時除雪（道開発局）実施により、三十三年の冬からは、花畔―石狩間までバスが運行された。このため『前年冬まで雪上バスを運行させ、乗客一人当り四、五十円の赤字を出していた北海道中央バス㈱会社は大喜び。』そして、石狩の雪原を二冬疾走した雪上バスは、車庫に入り、鈴の音を響かせて数十年駆け続けた馬橇もなくなった。

また、このエピソードとして、町議会土木委員として道路改良工

事実現に努力された（故）若林清作氏（昭和二十二年から三十年まで三期十二年間町議会議員）から私がお聞きした話の中に、このことに触れて「豪雪地の新潟県長岡市まで調査に行った。雪上バスが運行された年、客馬橇組合の前を通りかかった時、組合員に呼びとめられて『営業妨害をするのか』と叩かれた。」ということがあった。

なお、道々石狩手稲線の除雪は、同三十六年冬から実施。

注　主要参考文献『開発』第一五号　昭和四三年　北海道開発局
『北海道中央バス四十年史』昭和五九年　北海道中央バス株式会社
『北海道新聞』

冬の年中行事

「きぬさらぎ」と「きもだめし」

駒井　秀子

冬といえばやはり二月である。

江戸時代の享保二十（一七三五）年に出版された「江府年行事」に、『和名衣更着（きさらぎ）といふ。此月余寒はげしくて　さらにきぬを着せれば、きぬさらぎといふを略せり』とあって、重ね着をせずには耐えられない二月の寒さが、この月の名の由来であることかがわかる。実感的でとてもおもしろい。ことばの生い立ちの背景に、人びとのくらしが見える。

その、なんともかとも寒くてたまらない厳寒期に、漁師の若い衆たちが、氷った石狩川を裸足で往復したというから驚ろく。きもだめしである。このことは、一九三五年（S一〇年）生まれの其田辰雄さん（親船町）の思い出話だから、そんなに古い昔のことではない。

冬場、他に遊ぶ場所とてなかった当時のこと、本町側の渡船の待合所をたまりにして、裸足の若者が、ケモノのような咆哮を発し（思わず声が出るに違いない）、氷った川の上を猛然と突走る。まだ童顔の残る少年も混っていたであろうか。

『足の感覚、無くなってさ、針にでも刺されたような感じがしたもんだって。』と、語る其田さんはいかにも懐かしそうであった。

日本に、神事として冬の海に入る行事があることはよく知られている。厚い氷を張った石狩川の、最も狭い地点を選んだとして六百メートルはある距離を、数人の青年が素足で根限り走って往復する。こんな行事があっても不思議ではないと、ちょっと想像した。

ひとつのイベントが行事として定着するには、その背景（こじつけであれ）づくりが必要であるし、広範な人びとの関心も得なくてはならない。多分、こんな時代にハダシで氷の上を走る若い男の子など居るはずがなかろうけれど、と思うと、やっぱり現実的なことではないらしい。

私は、一九七六年（S五十一年）の初冬に石狩町民になった。いきなりの冬である。心細く不安な大量の雪と、目もあけられぬ地吹雪の日の買い物に、スキー用のゴーグルをかけて出かけたことは今でも時どき思い出す。三度めの冬にはもう使わなくなったけれど、家が建てこんだおかげで、さしもの地吹雪も土着の猛威を喪ったのだと思う。それと、私の方でも、この土地の冬に馴染んだ。

毎年のように厳寒の季節を選んで、モノ好きな仲間と海や山を歩いた。かんじきも履いた。灯台から河口に向けて雪の原を漕ぎ歩いたり、海岸ぞいに浜辺をたどったり、地蔵沢や望来へも行った。崖の急斜面を、ビニールのふろしきを橇代わりにして滑り降りたこともある。数年のあいだ、私と石狩の冬は深い友情で結ばれていた。

移転した当初、ある小さな出版社の機関紙に、来札のアイヌ部落のことを書いたことがある。その中に、

「風が横なぐりに襲いかかってくる。土堤にのぼって対岸をじいっと見ていると、芯から冷える。水面を氷らせようとして吹く風が、細かい氷の粒子をびしっと寄り集めて作った鋭利な刃物の

ように感じられてくる。それが私のからだを突き通って行く時、ほんとうに、皮膚をちりちりと裂いてゆくかと思われた。」という部分があった。これが十三年前の私の実感だったのである。今では、その、氷のつぶてのような川風や海風にさらされていると、なにもかも生まれ変わるような爽快な気分になる。あんまり風が傍若無人だから、いっそのことすっからかんになって潔いのかもしれない。

きっと人跡未踏の雪の原での「冬」との交歓が、この土地への愛着と熱意を植えつけてくれたに違いない。

俚人心得草

『「フォーク・ロア」を民俗学と訳するのは間違っている。しいて訳すれば「俚人心得草」とでもいうもので、何も学なんてもったいらしく言うにはあたらない。』

と南方熊楠は言ったという。民俗学となれば対象は広範で手に余るけれど、住む人びとの心得のひとつふたつと思って踏みこんでゆけば、道も見つかるかもしれない。年中行事を集めておこうと思っていた矢先に、この言葉に出会って、ちょっと嬉しかった。

和歌森太郎も書いているように、漁村での生活は農村に比べて、季節感覚を印象づけるものが少ないだろうから、行事もまた乏しいと思う。ただでさえ、年中行事は消えてゆく。生活の必要と切実に結びつくということがなければ、くり返し続ける意味もないし　楽しみも持続しない。時代のふるいにかけられて私たちの生活から消えてゆくものを、引き取めることはできないであろう。しかし、かつて行なわれていたその土地土地での行事の、日時、料理、誰が、何のためにということを忘れ去っていいということにはならない。更にまた、新しいリズムが生じた後も、以前の記録は生かされるべきなのだ。

誰方でも、お話を聞かせていただける方がおいででしたら、ご連絡下されば伺いたいと思っている。

節分

『こうやって話しているうちに、だんだんと思い出すべよ。十二粒横一列にストーブの上さ並べるんだ。その豆焼いだ焼けかたで、その年の漁（の吉凶）を占ってたなあ。そうだそうだ、春のにしんがいいとか、冬がいいとかだ。豆が真黒に焦げればうまぐないなとかさ。守り袋さ入れて一年中持って歩いていたよ。大人になって、北洋さ行く時も持っていったな。船には十七の春から乗ったが、ずっと持って行ったよ。』

この話も其田さんに聞いた。更に複数の人たちのお話をつき合わせる予定であるが、こうした真剣な豆占（まめうら）には、海でくらす人たちの生活が色濃く感じられて興味深い。其田さんより一回り若い、町外の漁村出身の人に会う機会があったのでこの豆占のこ

とを聞いたのだが、そんな覚えはないと言う。このことは、豆占が消えた年代を示しているかもしれない。

函館市内の商人の家に育った私の記憶はこうである。豆は炒り大豆で、祖父が撒いた。そのあとは、父が撒いた。家内のあらゆる場所に撒き、そのうちの座敷に撒いた豆を年の数だけ拾って、これを食べた。無病息災を祈り、身の厄を払うのだと聞いた覚えがある。私の家では、現在でもこの形を続けている。子ども時分は、目に見えない鬼の存在をかなり信じていた。実在を「感じて」もいたと思う。

大豆は各家庭でそれぞれ炒ったものだが、つい最近まで私は、あとで自分達が食べるために火を通すものとばかり思っていた。すでに私の年代（一九四五年生）で、この大事な点の伝承が喪われていたことがわかる。実はこれも、豆占だったのである。なにも人間が後でぽりぽりおやつにするため（年の数だけ食するという点も大事な意味を持っている）に炒ったわけではない。農漁村でなければ、家族の健康とか家運とか、我が身に都合よく考えたものでもあろうか。いったい私の母は、そのことを聞き知っていたであろうか。炒る豆の数はやはり一二粒だったのであろうか。

節分は二月の四日（あるいは三日）に行なわれている。豆を打ちつけて鬼を追い払うという現在の習俗は　室町時代以後のことといわれているが、庶民の生活に根づいた年中行事としては、最も親しみのある風俗のひとつである。更に由来をたずねると、大陸伝来のものと日本古来の俗と、時間をかけて混じりあっているようであって、全国に様々な伝統行事が残っている。

七草・七種

せり・なずな・ごぎょう・はこべら・ほとけのざ・すずな・すずしろ　春の七草

モチ・ダイコン・ニンジン・ゴボー・ヤキドウフ・ナッパ・アブラアゲ・春の七種（ななくさ）

後者の七クサが、正月七日に一般に石狩の人びとが食した七品であったらしい。田中実氏が教師時代、我が家の年中行事として中学生にまとめさせたその記録を見せていただくと、前述の七品がしばしば登場するのである。餅が米になったり、野菜の一品二品が他のものに変わったりということはあるが、大体似た組み合わせである。越冬できる野菜の種類は少なかったので、どの家でも、豆腐と油揚を使っていた。今では勿論、なんでも売っている。

昔は、元旦正月と小正月（十五日）があって、共通した行事を行なったようである。七日正月に、歳の夜や節分と同じ意味を認め、片手落ちにならぬよう気をつけた。土地によってこの日を、女の年越しとか神年越し、または馬の年越しなどと、いろいろに過程をたどってそれぞれ一定の形になったというのも面白い。

また別に、若菜の行事というのがあって、この日、七種の新菜を食すと万病を除くと信じられてきた。

いまでは、正月行事は殆ど元旦だけだと思うが、七種の新しい草など、まだまだ深い雪の下という石狩においてさえ、ともかくも七品を揃えて、皆で一年の無事を願うという部分は続いていたことになる。現在はどうであろうか。ゆとりのある気持で福粥(七品雑煮)を食べて、慎しみ深く神佛に祈るなど、やはり合わない時代になったような気がする。

落ちつきのない経済主導の荒波にのみこまれては変わらざるを得ないだろうが。

それに、女性の意識の変化というものが見逃せない大きな原因を作ったと思う。

行事の裏方は　常に女性であった。たとえば、女正月の風が必要でなくなった女性の社会的地位の向上と意識の変化は、時代の健康な進展として喜ぶべきなのだが、一方で、消えてゆく文化をひきとめる法もないとい点で心に残るわけである。しかしまた、自然の勢いというもので消えてゆく行事なら、仕方がないとも考えたりする。

私たちのくらしには、その土地に住む人びとに共通の区切りや共通の楽しみ、また共通の禁忌や慎しみなど、もはや必要ではなくなった。そういう、一斉に目を向け寄り集まる形は好まれぬようになり、多種多様な生活のスタイルが自在に選ばれるようになった。

こんな時代に　古くからの民間の習俗を採取する作業も　むずかしいことだろうと思う。しかし、ともかくも、いまのうちだという思いも強い。今年一年、なるべくたくさんの方にお会いしたいものである。

〈参考資料〉

「日本年中行事辞典」　鈴木栄三・一九八〇・角川書店
「江戸年中行事」　三田村鳶魚編・一九八一・中央公論
「年中行事むかしむかし」・和歌森太郎監修・一九七八・角川書店
「標準日本史年表」児玉幸多編・一九九〇・吉川弘文館
「我が家の年中行事」　田中実氏蔵資料より拝借

むかしの冬の憶い出

青木　隆

昭和三十年ころの石狩の冬の情景などの、おもいつくことがらをふりかえってみようと思います。

あのころもいまとおなじく海岸線にそった形で石狩川との間に、はさまれるように位置した本町市街地区は、現在よりもうすこし戸数もおおくて、暖冬つづきといわれるこのごろにくらべると、もっと、毎日のように季節風が海上から強く吹きよせて寒さもきびしく、吹雪の日がつづいたので、ふきよせられ積もった雪は、除排雪がおこなわれないので、建物の入口の前のところに屋根の高さほどに盛りあげられたところなどがたくさんあって、まちなみ全体がうずめつくされるような感じであったと記憶しております。

石狩川も雪氷（ゆきごおり）がたくさん流れて岸によせつけられ、しだいに結氷してしまうので渡船の運航も休止になり、渡船場職員たちの手入れによって氷の上に通路ができ両がわにはロープを張って安全をはかり、人びとはこの氷を歩いて向い岸との往来していたのでした。

この状態を地元の人たちは氷橋（こおりばし）と呼び親しんでおりました。なれれないうちにひとりきりで渡るときふとこの下を大河が流れていると考えると少しばかり不安な気持ちにかられ、対岸にあがったときの安心感など数十年を経たいまでもおもいうかべることができます。八幡町がわからは中学生が毎日朝夕、むかい風にほほを赤くして通学しましたし、配達員さんも、病院にかようひとも、また札幌へ出かけるひともみんながそれぞれの目的で、それぞれのことを考へながら、氷橋を渡ったことは、石狩川に大きな橋が架かって、車でひといきに渡れるようになった現在は、むかし話になってしまいました。

また国道二三一号線の道路は毎年十二月ころになって本格的な冬をむかえるとともに始まる大きな吹雪によって、雪の吹きだまり箇所ができ、管理する開発局の除雪がまだ実施されていない時代であったので、中央バスでは昭和二十八年か二十九年ころから、札幌市内の石狩街道以北を会社の自力による除雪をおこなって、かろうじて花畔までの定期便を確保するために、努力がなされておりました。それでも多雪によって途中茨戸まででストップしたり、あるいは何日間か不通であっても天候回復をまって運行が再開されるときもありました。

この当時は毎年このような状態で冬をすごし、四月に入って路上の雪がほぼ消えるようになるまでバスが石狩市街にこれなかったのです。

馬橇の時代

石狩ではずっと古くから馬橇が大切な役わりをはたしてきました。戦前、戦時中、そして戦後になっても、つねに鉄道のない石狩にお

「喜びも悲しみも幾年月」ロケ。ロケが終了した夜に、佐田啓二氏が札幌に戻ったとき。夕刻発の定期便馬橇に乗る(於やまたま)。

いては、冬の交通機関としては永い間馬橇だけがたよりにされ、おおくの分野において利用されたのでした。

それは冬の交通の主役だけではなく、食料品や生活物資など、さらには毎日の新聞、郵便物なども、みな馬橇の輸送によっておこなわれ、石狩のひとびとの生活をつねにささえてきました。

乗合い式の客馬橇はバスが不便になるとすぐ地元の人で個人営業の刃紺野さんや㊙三上さんたちがさっそく毎日定時に二台か三台がでて、それぞれ六名ぐらいまでの客をのせて馬を走らせました。

バスが冬期間全線運休になっていた当時には札幌まで(二十四粁)馬橇で直通したことがおおかったので、そのときは順調に到着できても約四時間を要したし、吹雪とか積雪がおおい日などは、五時間以上もの間ずっと、馬橇の中で座布団にすわりつづけたままで途中のトイレタイムもほとんどないので、乗客もかなりつらかったのです。

また当時は沿線の農家がみんな馬橇をもっていたのでその交通量は札幌に近づくにつれたいへんおおかったために雪の道には橇の通った溝が深くつき、さらに馬の足で穴をあけるので、たいへん荒れてしまいそれに道路には吹きだまりによる傾斜もずい分あったので、途中で乗合い馬橇がひっくり返り、乗客が雪の中に、ほおりだされることもよくありました。

『長時間じっとがまんして寒いおもいを堪えしのぶよりは、歩いたほうがよい……』といって元気な人は雪道を歩く場合もありましたが、なにぶんにも距離の長い雪の道なので、そうとうにつかれてたいへんでした。

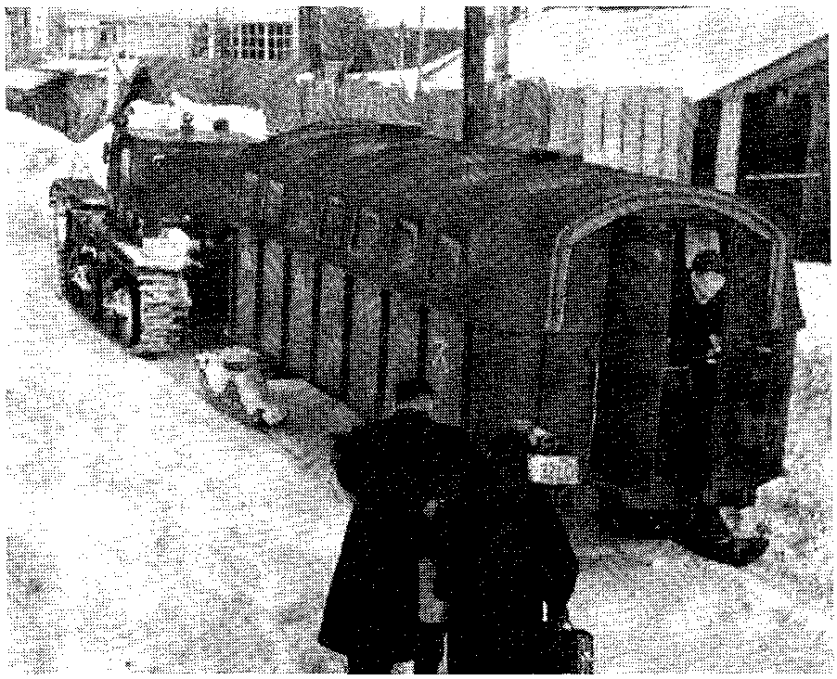
現在から三十年あまりもむかしのあの当時においては、いまの時代のような除雪が完全に施されていてマイカーで夏とかわらぬ時間で走れることなどは、まったく想像もできないことであり、ひたすら雪の深い地方の冬はがまんの生活もやむをえないという、むかしからつたわった割りきった考えで、いろいろな生活上の不便をも、じっとしんぼうをし、がんばり堪えしのんだので、春をむかえたときの喜びは、現在では味合えないほど、おおきなものがあったのでした。

雪上車

そうした中にあって石狩の冬の交通をなんとかよくしてほしいという気運が年々たかまるなかで中央バス会社において研究をつづけ独自に試作していた雪上車を昭和三十一年の一月から花畔〜石狩本町市街間で定期的に運行させました。

札幌からバスできた客が終点の花畔で雪上車に乗り替えて、石狩に向うものであった。その車体の構造は中央バスの整備工場で客席用に鉄製のボディをつくり、二人掛けの椅子を前向にして両側にならべ、中央には通路があって、屋根には天幕を張り、車両のかわりにスキー状の大型そりを四個つけてスプリングをきかせて振動をふせぐようにされたものであって、二十五名程度の乗客がのれたと思います。これをブルトーザーが時速十五粁か二十粁？ぐらいの速度で引いて走行しました。客車には点灯もされ、車掌も乗務していて、夏季とおなじに案内がされ、始動や停止などには運転手とブザーで連絡しあって、さらに乗車券の車内販売もしました。

これは客馬橇よりも所要時間や料金面、当時としては乗客からたいへん好評をうけて、よそから来た人もめずらしがったり、感心したり、厚田村にゆく人たちの連絡（石狩で渡船に乗り八幡町から客



本町を出発する雪上バス

馬橇に乗る〜）にもよろこばれ利用されました。

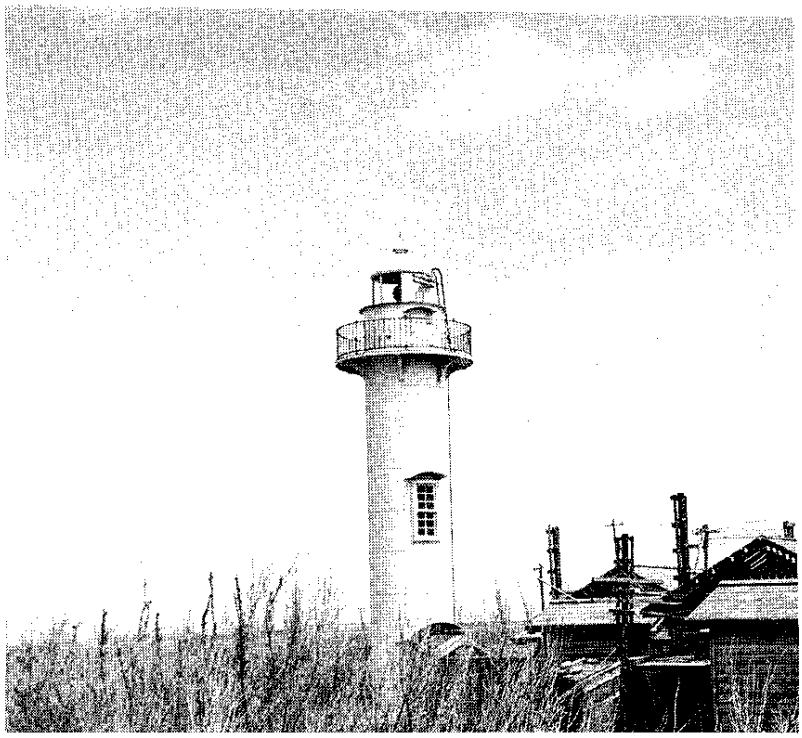
しかしこのあと開発局の手による国道の除雪が年々強化されるようになったので数年後に、札幌〜石狩間のバスが通年運行できるようになったので、全国的にも、ただひとつといわれためずらしい雪上車も短い寿命を終えることになり、その姿を消しました。

映画のロケが来町

昭和三十二年の三月でした。そのころ松竹映画社が企画し撮影をすすめていた「喜びも悲しみも幾歳月」のロケーションが石狩灯台で実施されるという話がつたわり、出演をするのに当時のトップスター佐田啓二や高峰秀子たちが訪れるという噂が町のひとびとのあいだにつたわり、始めのうちはこの雪深い石狩へほんとうにくるのだろうかという、なかば疑いと、おどろきが、いりまじりあいそして確実なことがわかるとともに、期待がおおいにたかまり町中がこの話題でもちきりになりました。

やがてロケ隊が石狩入りの日となって、木下恵介監督をはじめ大槻助監督その他のスタッフ、それに佐田・高峰の大スター共演する坂本武・井川邦子などの一行総勢二十名あまりが到着して、宿舎は石狩砂丘のそばにあった、むかし鮭漁が盛況時、定地漁場の親方の屋敷でおおきな建物を同じ経営者が手直しをして、あらたに営業をしていた吉田旅館に泊まりました。

そして翌日からロケが旅館から約二粁ほども河口に寄った石狩灯台ではじまりました。灯台のあたりは風雪をさえぎる、なにひとつない白一色の海浜地で、ときおり吹雪く寒い日にもかかわらず、ロケの見物にまちの人たちがきておりましたが、そのひとたちがおどろいたのは灯台が赤と白色の横縞にあざやかに彩色されていたことでした。



白亜の灯台（昭和32年以前の姿）

それまでの石狩灯台は白一色の灯台だったのが、この映画の後援をした海上保安庁が、雪景色のなかの白い灯台より赤と白のほうが沖合いの船舶からもよくみえるということで急きょ塗りかえをしたのでした。もちろんそのためにカラー映画の撮影効果もいちだんとたかめられました。

あの映画では海上保安庁の職員である、いわゆる灯台守りと呼ばれたひとと、その妻とが各地の灯台を転勤しながら、ほとんど外部のひとの顔をみることもないような単調な生活にもめげず、航行船の安全を守るという責任のおおきい仕事をとげるために、妻も夫をたすける日を休むことなくつづけ、そして老年になって、ぶじ退職をするまでの美しい夫婦愛、家族との愛情、そしてかかわり、ふれあうひとたちのやさしさなどを描いたのであって、石狩のロケでは佐田・高峰の扮した若夫婦が、石狩在勤中のできごとを撮り、そのうちで妻が初出産をするために馬橇に乗って吹雪のなかを、ひとりきりで心細く、遠い町の病院にむかい、若い夫は職場から、はなれられずに心配ながらも妻をはげましみおくる〜などといった、おおくの場面が撮影され、さらに夕景のシーンや夜に入り暗くなってからもおおきなライトで照明しながら、寒い野外で長時間にわたって、テスト本番とくりかえし、すすめられ、見ていたひとたちは映画をつくるために関係者ががんばる姿をみて感激をしました。

宿舎であった吉田旅館の若夫人であった吉田サチ子さんに、あのころのことを聞きましたところ、おおむねつぎのように話してくれました。

吉田旅館のひとたちと高峰秀子さん、後列中央が吉田サチ子さん

出演者のかたたちは三泊して、監督やほかのスタッフには四泊したひともおりました。冬におおぜいの泊り客は、初めてでしたが近所や親しくしていたひとたちも、スターに逢えるので、おおよろこびで手伝いをしてくれましたので、たいへん助けられました。寒いときだったので暖かく泊ってもらえるようずい分気をつかいました。おもな客部屋には薪ストーブが用意されましたけれど、おおきな部屋などには泥炭ストーブでしたので、はじめてみたといって、たいへん珍らしがられました。

（註泥炭のストーブは石狩では戦前からおおくの家庭で用いられていた暖房で、夏季間に北生振方面の泥炭地で採掘し乾燥させたものを鉄板製の独特のストーブで燃やすのですが、薪とはひとあじちがった、やわらかな趣のあるものでした。）

三、四日も泊まってくれましたので、それだけに食事の支度も、あのころの冬の石狩では材料にとぼしく、たいへんこまりましたけれど石狩鍋をはじめ郷土料理的な味をだすように調理場のみなさんたちとがんばりましたのでそれがよろこんでいただけたようでした。

高峰秀子さんは東京の自宅にいる夫の松山善三さんに電報をうちたいのでと私にたのまれたので「二十六ヒ・カンパイ……」という、たしか結婚記念日の電文をわたされまして発信したことを記憶しています。

ロケに子役が必要ということで私の長女の庄子が井川邦子さんの子供の役になり、高峰さんの子供役には、もっと小さな子がほしいということで庄子のいとこ、圭子ちゃんが、それぞれ出演しました。娘の庄子は、そのときの馬橇がひどくゆれて痛くしたことを、いまでも忘れずにおぼえているようです。

夏八月に、もういちど一日だけ石狩灯台でのロケにこられましたが、そのときは泊まりませんでした。時期的にハマナスの花が散ってしまって無かったので、造花の真っ赤なのをハマナスの樹にそえるようにのせて撮影されました。

そして映画が完成し十月に札幌で封切上映されたときに招待券が十枚ほど送られてきましたので、手伝ってくれたひとなど、みなさんと一緒にでかけて、たのしく観ました。と語ってくれました。

石狩町では本格的におこなわれたロケは、このときが最初でありましたが、完成後の上映結果は全国的に大好評をおさめましたし、また主題歌も大ヒットして現在でも、なおときおりテレビのナツメロ番組に登場し、あの当時をよみがえらせてくれます。

石狩川治水工事と生振治水市街地

吉野惣栄

はじめに

私は随分前から通称『生振治水市街地』を中心とすることについて書き残したいと思っておりました。この生振治水市街地というのは、本格的石狩川治水工事の生振捷水路工事が原因となって構成された一時的集落のことです。市街地のことについては、「いしかり暦」に先輩である前川会員が古老の聞き書として既に発表しております。その際、私も地図などで一部協力いたしましたが、今では市街地に生まれ育ち、そして現存するのは奥村武さんと私の二人だけになり、地元で働いた方もわずかとなってきています。

私はここで生まれ育ったものとして、また、叔父の惣三郎が治水工事の機関車に乗っていて（機関助手？）事故で死んだこともあって私なりにまとめて置きたいと思いこの文章を書きました。

引用参考文献は、文末に主要なものを上げました。文中の引用は「」でくくりましたが、一部要約して載せ、かならずしも原典を明らかにしていない場合があります。また、引用文献中、工事報文については原文どおりとしましたが、他の特に尺貫法で示されている部分についてはメートル法に換算した部分もあります。こうしたものをまとめるのは、不慣れで少々型破りの部分もあるかと思いますが御寛容下さい。

何故治水工事を必要としたか

それは言うまでもなく洪水防止であり、これを採り入れた第一期拓殖計画（明治四十三年～昭和元年）によるものであります。

第一期拓殖計画とは、当時の社会的要請に応じながら基本的には将来の経済発展と道民生活の向上を目ざして、長期展望に立った政治的施策で、これを急がせたのは、明治三十一年九月に全道を襲った未曽有の大洪水でありました。ちょうど、北海道の移民政策が軌道に乗りつつあった頃だけに、定着寸前の農家が開墾なかばで土地を離れなければならない程の惨状に、政府の認識も漸くにたかまり、道庁内に大塚貢を長とする北海道治水調査会が翌三十二年に設けられました。

石狩川の基礎的な調査が実施され、その成果として「石狩川治水計画調査報文」がまとめられ明治四十二年十月、時の川島北海道庁長官に提出されました。

これにより明治四十三年計画的、かつ本格的な治水事業に着手したのであります。

本道の治水事業は最初から当時の技術の粋を集めて調査計画され、拓殖計画の中での基本的な施策として推進された点、本州他河川に見られない特色とされています。

捷水路掘削前の生振

捷水路開通後の生振

洪水の種類

石狩川の洪水には三つの形態があると言われています。

1　融雪洪水

2　一般にいう洪水、即ち夏期洪水

3　逆水洪水

北海道のような多雪地帯では雨期の他に融雪期に特殊な洪水が発生します。冬中に降り積もった雪が山間奥地にそのままの形で多量の水がたくわえられ、それが春の暖気により解け流れだすことが原因でありますが、融雪洪水は単に春の暖気による融雪増水のみで洪水が発生した例はなく、暖気が続いたあとに降雨があり、その両方の作用によるものが大部分とされています。融雪洪水の殆どが毎年四月中旬から五月上旬に発生し、滞水時間も長く継続時間六十時間から下流部にあっては二百時間に及ぶこともあり、年毎に相当の被害が出ています。気温十度C風速毎秒五mのとき一日に解ける雪の量は雨量に換算して四十五㎜位といわれ、融雪出水はきわめてゆっくり長時間にわたって流出し、絶えず融雪が起こるため河川の水位が高くなり、これにあたる程度の降雨が伴うと洪水が発生します。

又地上に降った雨はいろいろの道順を通って川に注ぎ最後には海に流れ込みます。大雨が降ると雨水は、大量に川に流入し、為に河川は急激に増水します。この増水によって堤防の弱い部分がその水勢によって破られたり合流点で水嵩が増し、あるいはさらに雨が多ければ河道だけではこれらの水が流過出来なくなり堤防などを越えて河道外に氾濫します。これが普通の夏期洪水であります。

この外に石狩川では逆水による洪水があります。石狩川本流の河川堤防が次第に整備されるに伴い以前は大雨のとき河道外に氾濫していた上流の大部分が河道内を流れるようになり、この結果本流の水位は同じ程度の雨が降っても以前より高くなり、従って最近では石狩川流域に大雨が降ると、とくに本流下流部では異常に水位が高くなり石狩川に注ぐ支流の合流点では、このために支流の水が本流に流れ込めなくなり、さらには本流の水が逆に支流に流れ込み、これによって発生する洪水が逆水洪水であると、以上が専門家の言う洪水の形態の定義とも言うべきものであります。

主な洪水

嘉永四年（一八五一年）石狩川一帯に洪水が発生して大氾濫したため松前の村山伝次郎が越後から治水工事に長じた者十名を雇い安政四年に至る十年間修築事業をしたとの記録が古文書に残っていると言います。

また明治九年札幌に気象観測所が設けられて後、明治二十三年、二十四年相次いで洪水が発生し、更に明治三十一年九月上旬に未曽有の大洪水が起こりました。当時の北海道庁長官は治水事業の計画を樹立する必要を痛感し、明治三十一年十月二十日に道庁内に北海道治水調査会が設立されたことは前記の通りであります。この時の洪水の模様を詳述するなら、この年は春以来しばしば降雨があり既

に春夏二回にわたって石狩地方に出水がありました。加えて九月六日から八日にわたり、またまた強風を交えた豪雨に見舞われました。札幌一五七、旭川一六三、函館一九六、釧路一四一（何れも㎜）と、雨域は全道にわたってのものでした。

この時の札幌測候所の観測値一五七㎜は明治九年同所開設以来の記録となりました。が因みに同年値一〇〇㎜以上に達した降雨の例は、明治九年九月十七～十八日約一一六㎜　明治十二年九月十三～十五日約一一八㎜　同年十月二十～二十二日約一〇四㎜、明治二十二年八月二十五～二十七日約一一三㎜　明治二十三年九月二十三～十月五日約一一四㎜　明治二十五年九月三～二十二日約一二〇㎜　同年九月二十八～十月八日約一一九㎜　明治二十九年十月五～十七日約一二七㎜

以上の記録があります。

この大雨は台風によるものであり、台風から北に延びる気圧の谷が北海道に達した六日八時から降りだし、台風が東北地方を北上するに従い強い雨となって北海道南岸に達した七日十時に雨はピークに達しています。

台風の上陸後次第に雨は小降りとなり、北海道東方海上に去った八日九時に雨は止んでいます。この豪雨によって石狩川流域は大氾濫に見舞われ、死者一一二名、浸水家屋一六、三四七戸、流失家屋一、〇四一戸、浸水面積四一、一三〇町歩、に及び開拓民は困苦の生活に追われ、一部に離農する人々も出たため、九月九日道庁内に臨時水害調査係を設置、江別に出張所を設け、米、塩の補給に努め、傍ら罹災の実態調査に当たりました。また十月二十日に北海道治水調査会を設置し、石狩川の根本的な治水事業計画調査が始まり、石狩川の数ある洪水の中でも特記されるものであると言う。

この洪水で明治二十七年に入殖した愛知団体のうち、通称下段に居を構えていた方々及び同年代以前に入殖した紅葉山砂丘以南と美登位川流域の方々が罹災したであろうと思われます。

明治三十七年の洪水

明治三十七年六月二十六日台湾の南部に発生した熱帯性低気圧が次第に南西に移動し、二十八日には中国大陸に入り、更に北東に進み二十九日午後十時には低気圧の中心はウラジオストック付近に達して発達、その先端は既に本道北部に影響を与え三十日には本道を横断して、東部の沖合に抜けましたが、この低気圧の中心が接近するに従って雨の勢いが強まり七月一日迄続きました。石狩川流域内の六月二十九日から七月一日までの降雨量は札幌三十六㎜、岩見沢約八十九㎜、上川約七十一㎜、でありました。

特に後志の北部から石狩の海岸地帯と日高方面が強く河川の増水が甚だしかったそうです。次いで七月九日本州の南方海上を北上した台風は二十二時紀伊半島に上陸し日本海岸沿いに北上して十日二十二時には、えりも岬の南西海上に進み北海道東部を通過して十一日六時にはオホーツク海南部に達しました。この台風による降雨は台風から日本海に延びる気圧の谷が北海道付近に達した九日十一時

から降り始め南から暖湿な気流が流入したと思われる九日二十二時に一回目のピークが現われています。

台風が北海道付近を通る十一日一時迄雨が降り続き、新潟沖を通過した十日十七時には一時間に二十・四㎜の強雨となり二回目のピークなっています。七日から十一日にかけての降雨量は札幌一七六・七㎜、上川一五〇・七㎜、上富良野一五七・七㎜、愛別一二二・三㎜となり、明治三十一年以来の大雨となりました。

これにより石狩川水系の各河川で増水が進み、本流では十日昼頃より次第に氾濫を起こし始めました。

氾濫面積六、四六四町歩、総被害額二、六三〇千円にものぼる大被害となりました。

明治三十二年以来、石狩川の治水計画樹立のための調査を行なっていた岡崎文吉技師は各所の水位観測値、浸水実積、地形図等から氾濫量の検討を行い、石狩川の対雁地点で計画洪水流量を八、三四〇㎥／Sと算定しました。

この流量が石狩川第一期工事対雁下流における沿岸平野一〇、〇〇〇町歩の氾濫を防止するとともに未開農耕適地九、三八〇町歩の開発を促進するため河道湾曲部には捷水路を開削し、その両岸に堤防を築設して計画高水流量を安全に流下させ、併せて上流の重要な市街、旭川、深川、滝川の市街地に堤防を築設する等の基礎流量になったのであります。

石狩川治水工事

組織的治水工事は巨費を要し、拓殖財源の都合上一時に全河川の工事に着手することは不可能なのでこの対策として重要河川のみ治水工事を進め、当面応急的護岸工事を行なうこととなりました。即ち洪水に際しては農耕地、若しくは市街地の欠壊流亡等の不測の危害を及ぼす虞れある箇所に対し、応急的導水護岸工事を施行し、将来における組織的治水事業の障害と国家経済上の不利を防止する。

（第一期拓殖計画事業報文）に該当する箇所として、明治四十三年五月花畔に治水工場が設置され、花畔市街地地先（旧学校裏）から下流の護岸工事に着手しました。

事業報文によれば「石狩ヨリ上流三里花畔付近ハ欠壊ノ延長並ビニ湾曲ノ程度甚ダシク　猶此ノ上ニ流路ノ悪変ヲ看過スルニ忍ビザルノミナラズ該所付近ノ如キ砂質ヨリ成リ土質脆弱ニシテ湾曲甚ダシクシカモ水深大ナル箇所ニ対シ最初ニ導水護岸工事ヲ施行シ其ノ結果ヲ研究スルハ技術上及ビ経済上ノ見地ヨリシテ必要ナルガ故ニ先ズ初年度ニ着手シ次イデ上流二里半ビトイ川口付近ハ近来欠壊甚ダシク湾曲ノ度ヲ強メ堤防敷地全部ヲ流失シテ既設道路ニ及ボシ交通ヲ遮断スルニ至リ緊急防禦ノ必要ナルヲ認メ該所選定施行シ……」と。

土工事は全てにポンド軌条及び小土運車（一合トロッコ）を用い専ら人力による従来の土方作業で進められました。尚該工事に使用するコンクリート単床ブロックは直営により研究を重ねながら製造したものであり、該護岸工事は岡崎式ブロック単床の試験的施行に

終始し、やがて完成しました。

尚、工場は現在の花畔入口付近、花畔青少年会館一帯（国道、銭函、花畔間排水運河、茨戸川の三角地帯）であったと思われます。

その後、いよいよ生振治水工事が、堤防、捷水路併用方式により着手されることになりますが、それでは如何に計画設計されたか、計画洪水量の決定は、先の岡崎報文による　八、三五〇㎥／Sでありますので、省略し、この計画洪水量をいかなる方法で防禦するか、その基本方針がどういう理由で樹てられたかを調べてみたいと思います。

先づ岡崎報文の序文を引用してみましょう。「本川ノ特性ニ鑑ミ我ガ国及ビ欧米諸国ニ於ケル治水事業ニ関スル実験ヲ攻究参酌シ内務省当局ト反覆商量ノ上治水計画ヲ立案シ……」とあるように計画立案にあたりましては内外の実例を参考とし、内務省と数回にわたる検討を経て方針が決定されています。

原始河川に対する岡崎博士は、十有余年に及ぶ現地調査と、財政の実情、洪水の悩む農民と、国家百年の大計と言う現実的課題に、苦悩と苦労を重ね、その上で樹立した基本的方針であります。その中で、技術と財政を何処で協合させるか、それを証明させるかの比較を繰り返し、繰り返し行なっていますが、その第一は現河道改修方式によるか、分派河川を新たに開削するか、即ち放水路方式との比較検討でありました。この検討経過は「石狩川篠津生振間放水路線平面図」として比較資料が残っています。

これによりますと放水路方式は、全く現河道と分離し開削するもので、報文にはこの方式に対する見解が次のように纏められています。「下流ヨリ漸次本河迂曲部ヲ直通シ人工河道ヲ設ケ洪水ヲ快流セシメ、以テコウ洪水面ヲ低下サセ氾濫ヲ防グコトハ洪水防禦ノ一法タルヲ失ハズ」と、放水路方式の検討価値を評価しながらも、「天然ノ平衡状態ヲ破壊シ平状ニオケル水面勾配急ナルガ故ニ水勢急激ニシテ新河道及ビ上流在来水路ノ維持困難ヲ加エ水深ヲ減ジ船舶ノ航行ニ支障ヲ来スコトハ蓋シ疑ウベカラズ、且ツ在来水路ヲ廃棄シタル結果、地方ニオケル水利ノ便ヲ奪ヒ漁業ヲ全滅シ、併セ之ヲ本計画ノ放水路ト比較スルニ、ソノ工費ノ多額ヲ要スル不利アリトス」と述べ河道の維持と利水、漁業面においても後日問題を生ずることを指摘している。これに反し「現河道方式、即ち局部切替工事は他に良案がないので良案なり。」と締めくくっています。

ここで注目すべき点は、十有余年に及ぶ現地調査を通じ石狩川下流地帯の泥炭を含む軟弱な河床に対し危惧をもっていたと言うこと。放水路方式によった場合、河床の軟弱地盤が洗掘され、それが河道の維持を困難にすると観破していたことであります。

堤防方式と堤防、捷水路併用方式

1　仮に明治三十七年七月洪水を標準とし、堤防方式のみによる新堤防は厖大なものとなる。

2　堤防工事は本支川全部を通じ竣成しなければ効果を得られない。

3　国家財政に鑑み一時に巨額にの投資は事情が許さない。

4　茨戸下流は両岸が比較的高いので川道拡張をしなければ下流

の水位上昇に及ぶ。

以上の理由により、堤防・捷水路併用方式が採用されたのです。

明治四十三年九月花畔工場が設置されてより七年漸く大正六年「直通水路及び両岸築堤敷地に関する官有、民有地の境界（一〇〇間巾の通称十線風防があった）収用地測の測量及び土地評価等の調査」を結了、次いで大正七年四月八日石狩町、篠路村、当別村、及び江別町の各町村長並びに札幌市市長立合のもとに調印、登記手続も終わりました。

生振治水工場の設置

大正七年度

大正七年十月生振工場が設置され生振村九線北一号地先の高台（紅葉山砂丘）の一角に治水工場の事務所（出張員宿舎併設）が建てられました。上は美登位川取入口から下はロッコ（六戸）あたりまで見渡せる絶好の場所であり、建物も平屋ながら新川に面し三方ガラス窓で雨の日でも事務所の中から各現場を一望出来るものでした。

かくして事務所が出来、人員も配置されました。当時は三府四三県が内務省の所管であったので広く全国から治水工事の経験者を転勤の形で動かせたのは本道のため幸だったと思います。

単に人材だけでなく機械類も所管替といって廻してもらうこともできました。

工事についても青写真が出来次第、測量や枕打ち等基礎的作業にかかり日に日に活気づいていくのがわかりました。

新水路断面は基線より下流は地盤が高て復断面で低水敷巾二三〇m、中水敷巾四四〇mで計画流量を流下し得ると云うものでり、基線より上流は低水敷巾一二〇m中水敷巾二八〇mで　左右岸堤防間隔九一〇mでいよいよ十月二日から工事にかかりました。

大正八年度

大正八年先づ計画水路の中ほどを南西より北東に走る小高い丘陵部分（紅葉山砂丘の一部）の取除きにかかりました。施工は人力掘削と馬トロ運搬で進められました。

計画では陸上掘削は機械施工で進められることになっていたのですが、掘削機、機関車、土運車、軌条等、時あたかも第一次欧州戦争の最中にて、そのため調達に甚だ困難を極め同年末には僅かに人力土工用に供するに十二ポンド軌条十マイルと一合土運車（トロッコ）五〇〇輌が石狩川治水事務所の現有機械の全てだったのです。

この年六月当別太工場が設置され篠路第二、篠路第一、当別新水路を分担することになりました。

尚この年治水専用私設電話が架設されました。

経路は石狩川治水事務所（札幌市北一条東二丁目）から石狩街道沿に茨戸に至り、分岐して一方は花畔を経て石狩に、一方は美登位・当別を経て江別に至る二回線が敷かれ、更に北は生振に、南は当別太の各工場に繋がるものでした。

大正九年度

いよいよ掘削機（エキスカ、本名エキスカベータと言うそうですがこれからは通称エキスカと呼ぶことにします。）が導入されることになり、先づ計画敷地の中心に敷巾五・五m、延長三、二〇〇mの巨大な排水路が人力により掘削されたのを始め基線から下流部にある丘陵地帯はエキスカによる二段掘りを必要とするため集中的に一段堀りの掘削を開始しました。又右岸北二号から三号にかけ表土が泥炭のため、深さ一・五m程を剥取る作業をトロ運搬で進められました。

配置されたエキスカ及び機関車は現場で組立てられ九月初めてエキスカ一台を運転するまでになりましたが監督以下人夫に至るまで始めてのことなので随分苦労したようです。この頃の様子を事業報文は「漸ク冬期ニ近ク創始ノ時ニ当リ従業員ノ大部分ハ初心者ニシテ諸設備又不完全サラニ機械ノ故障、土運車ノ脱線等頻々トシテ起リ運転回数又捗シカラザリシガ、漸次各部ノ改造ト従業員ノ熟練トヲ加ヘ作業ヲ継続セリ」そして冬近くエキスカは二台に機関車もこれまた二台と漸く計画通りの大機械土工工事は文字通り軌道にのりました。また冬季も施工可能かどうか試験的に引き続き作業を進めたが、「枕木ハ路面ニ凍結シ、線路ノ移動ニハ一々ジャッキを使用セザルベカラズ其困難言語ニ絶セリ」という状況だった。しかしこうした中で「監督員以下全員ノ努力ニヨリ冬季中工事ヲ継続スルヲ得」という経験を重ねています。この頃はまだ組夫の制度がありませんので人夫の大半は土地の青年だったと思われます。これは開拓農民にとって唯一の現金収入の場でもありました。大正九年の事業報文によりますと、「本年度初メテ到着セル掘削機二台ハ東京月島鉄工所ノ製作供給ニ係リ鋤簾式ニシテ軌条三条ノ上ヲ汽力ニヨリ自走シツツ掘削シ得ルモナリ当機ハ総重量四十二噸容量六、二立方尺ノバケット十九個ヲ供ヘ、一時間ニ二〇立方坪最深軌条面下九尺ヲ掘削シ得ルモノトス」続いて機関車も到着しました。「機関車ハ二台大阪楠木製作所ノ供給セルモノニシテ、六聯タンク式ニシテ、軌間三呎六吋総重量約二〇噸トス　軟土盤上ニ仮設セル三〇封度軌道上ヲ運転スルモノニシテ線路凸凹甚シク且曲線ノ急ナルノモアルヲ以テ諸般ノ構造及工作ハ極メテ堅牢ヲ旨トセリ」

かくては大土工工事の構想も着々と進行すると共に現場担当員、及び常夫が次々に新潟県（信濃川治水工事）や千葉県（利根川治水工事）から転勤になり配属されてきました。

こうして人が集まってくると先ず一番先に必要なのは住宅であります。それで将来をも見越して美登位地区に担当員宿舎二戸建一棟を（十線南一号寄り）、常夫宿舎棟割四戸建二棟（十線南一号川寄り）と、生振には担当員宿舎二戸建三棟（内一棟は事務員）が建てられ、神保長太郎さん、事務員宿舎の方には鈴木熊八さんが住んでいたこと、美登位の常夫宿舎の方に阿部馬吉さん（常夫頭で新潟から）が住んでいたことを後年記憶したものだとは思いますが、その時のことのように思い出されるのです。

一方此処で働く人を相手にして民間の商店や飲食店、蹄鉄屋、そ

れから単独常傭人夫用の貸家も建ち始めて段々工場としての体裁を整えるともに聚落としての形も亦整え始め尚増加の一途を辿っていました。

大正十年度

この年も亦、エキスカ九尺堀四台を大阪楠木製作所より購入し直ちに現場に運び七月にはすべての試験運転をおこない、この成績は良好だったと記録されています。

こうして都合六台のエキスカを保有し掘削が進められ、掘削及び運搬作業は前年度の経験が生され、やや良好な実績おおさめたと、これも記録されています。

「機関車ハ前年度中大阪楠木製作所ニ六台ノ供給方ヲ注文セシガ内四台ハ到着シ残余ノ二台ハ本年度ニ入リ納入セリ　前年度納入ノ四台ト共ニ年度開始後組立ヲナシ直ニ運転セリ在来ノモノニ同ジク二〇噸機関車トス」

工事が進むにつれ行動範囲が広くなり軌条ならびに付属品も当然多くなり購入されました。『年度開始直後ニ三〇封度軌条一哩半転轍機、轍又一五組ヲ購入シ第二次トシテハ三〇封度軌条十二哩六〇封度軌条二哩半及十二封度一〇哩ヲ購入セリ」このように軌条の購入も進み、土運車も増強されました。

「五合土運車ハ其ノ構成材料タル台枠及車輪車軸其他木材金具類モ遂次購入シ所属工場ニ於テ制作組立ヲナシ総数七四〇台ヲ出来セリ又一合積土運車（トロッコ）ハ殆ンド機械工場ニテ純直営ニテ製作シ五十台ヲ出来スルノ外尚未完ノモノ二〇〇台アリ主トシテ支流夕張川治水デ用フベキモノニ属ス。」また『石狩川治水小史』所載の駒嶺氏によれば「現場では工法に未経験、未熟なる為技術修得のため若い技術者を内務省直轄工事現場に派遣し実習させました。掘削現場に於ける人夫の〝ヨッコノコーラ……ヨソコ前にショウ〟とか〝ポイント返せ〟（転轍器切替）等、利根川の現場から直輸入したものであります。」

この年、洪水に際し、工場や施設を守るため防水堤が築造されました。場所は基線の上流二十ｍと美登川取入口より下流二十ｍのところへほぼ延長三〇〇ｍのもので天端約五・五ｍ法約一割の仮設的なものでした。而してその頂面の高さは明治三七年七月洪水位を標準としたもので一〇～一五年間に一回起る洪水に対するもので、これ程までにしなくてもと思考されますが、設計当局は、唯かかる洪水の時にも臨時応急の処置をとるだけの準備はしておかねばならない。と仮設としては立派なものでした。

この防水堤をめぐって住民とのトラブルが二度にわたって起きますが、幸いこの年は何事もなく過ぎました。

そしてこの年も随分施設が建ちました。

監督員詰所、物品倉庫、工作小屋、常夫宿舎棟割八戸建五棟、二階建人夫収容所（帳場室炊事場併設）二棟、病院等が建てられました。他に運搬線も敷設されました。

大正十一年度

大正十一年度には新たに十三尺堀りのエキスカが戦列に加わることになりました。

「本年度購入ニ係ル掘削機六台ハ大阪楠木製作所ノ製作供給ニ係リ従来ノモノニ比シ掘削可能深四尺ヲ増シ軌条面下約一三尺迄ヲ掘削シ得ベクバケットノ数又三個ヲ増シ合計二十二個ヲ附セリ其他ノ構造ハ在来ノモノト殆ンド同ジ同機ハ昨年度中契約セルモノニシテ本年度早々江別ニ着セシヲ以テ直ニ掘削現場ニ運搬シ七月上旬迄ニ夫々組立ヲ了シ運転ヲ開始セリ」エキスカが到着し、直ちに現場に廻送するあわただしい期間が暫く続きます。またエキスカに付属する給水給炭など雑車輌の製作もおこなわれています。

こうして機械器具の購入は十一年度において終わっています。報文によりますと、「機関車ハ従来ノ掘削機一台ニ機関車一台ノ割合ニテ配属シ現在十二台ヲ有セドモ機関車ノ故障多ク為ニ作業ノ全盛期中掘削機ノ休転ヲ余儀ナクセラレ、延テ作業ノ進捗ヲ阻害スルコト尠カラズヲ以テ之レガ予備ト必要期以外ハ人力掘削機関車運搬工事ヲ進ムルコトトシ本流用三台支流用一台計四台ヲ購入セリ」と。

尚この年四月美登位に建設資材の集積場と江別機械工場の分工場が置かれ、建設資材の供給と機械の現地応急処理をおこなう役割を担うこととなりました。この頃生振新水路にはエキスカ九台、現場が両岸にあり二十トン機関車十二台を保有し、一現場一台の機関車が五合土運車一列車三十輌を早朝四時頃より午後十時頃まで休む間もなく土捨場迄けたたましい排気の音を立てて走っていました。この集中作業の新水路掘削現場の情景は今尚他に見ることのできない大工事でその大陸的な雄大さ、且つ活気あふれる壮絶なもの、であったと記されています。

従って分工場の作業も脱線等の事故で故障も毎日の事、昼夜の差別なく、昼の故障は夜間に修理し早朝の運転に支障ないようにその作業は必死だったと言います。

この分工場の機構は、仕上工場、機関車工場、鍛冶工場、製缶工場、木工部、運搬部（解体組立船積卸し）でありました。

某治水マンは当時を回想して次のように言っています。「職工さんは連日の徹夜作業にも金取りがいいので苦情を言う者もなくホクホクで、金取りのいいことでは治水一であった」と、又「職員も月給より多い月額旅費を貰い、工事に従事する者皆んながベストをつくし得た良き時代であった」と記しています。

こうした中で「八月下旬の増水の際、夜半大挙三〇〇名の農民が幾らかでも洪水の被害を軽減すべく仮堤防破壊に押寄せてきましたが、たまたまかかる際には阻止することなく傍観しているようにとの指示が本所から出ていましたのでただその様子を見守っていたそうですが幸いにもさしたるトラブルもなくその損傷は軽微で、直ちに復旧を終えた」そうです（山崎一明の手記を要約）。

又この年も生振と美登位に人夫収容所（前年度と同規模のもの）各一棟、美登位工場事務所（出張員宿舎併設）物品倉庫、監督員詰所、その他にも江別機械工場の分工場の建物が建ち事務所としての体裁も整いました。

尚昨年専任河川監視が常置されましたので河川監視の住宅一棟が

九線と十線の中間で基線堤防の下に建てられました。

大正十二年度

大正十二年度は予備としての機械器具の購入があった程度で、工事は各現場共順調に進捗していました。

又この年対雁工場が設置され、対雁新水路掘削を担当することになりました。

大正十三年度

大正十三年はエキスカ及び機関車に多少の移動ありましたが九現場に於て掘削が進み二段堀になり作業も亦一段と活発になりました。

こうして巨大な水路も形が出来上がり、洪水の流下に有効と認められるようになりましたので仮堤防を撤去することになりました。

これは大正十一年八月のようなトラブルを未然に防ぐ意図によるものであり、撤去は十月におこなわれ翌年春の融雪洪水から一部流下させることになったのです。

そしてこの年は労務者の数も大正七年工を起して以来最高の組夫七〇九名、単独人夫八十四名、計七九三名でそれに担当員家族持、事務員家族持、常夫家族持、単独人夫家族持、商店等を加えると夏期人口一、〇〇〇名程の聚落が形成されていた訳です。これが最盛期の 生振治水工事市街地(消えた街) の姿です。

大正十四年度

大正十四年度は四月二十日から増水によって、仮堤防撤去箇所から溢流を始め基線付近から八mの段落となって、水路に流入しました。当時の人はナイヤガラの滝が出来たと見に来る人もいました。

この段落によって地盤が後退し、その進行速度は四日間に五〇〇mというスピードで、この巾員は六十mもあり、このままの状態だと工事上重大な支障を来すことになりますので、欠壊水路の締切りをおこなうことになりました。ところがこの締切に対し沿岸住民は猛烈に反対しました。

いう迄もなくこの欠壊水路によって、洪水が相当緩和されるというのです。この二度目のトラブルがいわゆる名井、岡田協定と称されるものであります。

『北海道回想録』によりますと「水害を受けた部落民は未完成の新水路に洪水を流せ」と言って陳情に来ましたが、治水事務所側はこれを拒否しました。その理由は今通水したならば新水路の河道が乱れ収拾つかなくなる。「千仞の功を一簣に欠く、駄目だ駄目だ」の一点張りで拒否しました。

そこで部落民は、大挙して筵旗を押し立て、道庁の玄関前に集り、「洪水を流すか、名井勅任技師のしらが首を渡すか」といって、いきまき大さわぎとなりました。が時の土岐長官が玄関に出、低姿勢で丁重な挨拶をされ、さわぎを静めました。地元代表は、岡田代議士(石狩支庁選出、江別町出身)等を交え協議することを約束し、幸い事なきを得ました。

このさわぎの後、土岐長官、名井勅任技師、関係課長、所長、岡

田代議士その他道議代表者を交え協議の結果、二ヶ所の締切りが承認されました。しかし上流第一締切の天端を自然地盤より一・五m低下させるという条件がついていました。

時の生振工場主任山崎一明さん（新潟県、信濃川大川津分水工事より転勤、親子二代の治水マン）は「代議士側は終始現在のままで作業を継続するよう要求したが技術上無理なり、と、譲らずこの協定となった」と語っています。これが有名な名井、岡田協定であります。事業報文には次のように記録されています。「本年度融雪出水時、生振基線道路ヨリ上流ノ直通水路河道内ノ掘削未了ノ箇処越流ノタメ土砂ヲ崩壊流失シ新河道ノ一部通水スルガ如キ状態ヲ呈シ、下流ノ掘削工事未ダ完了セズ地質殆ンド砂ナルノミナラズ護岸工事又施工セラルザルガ故ニ其儘放任スル時ハ絶ズ水流ノ衝撃ヲ受クル結果河岸ノ崩壊ヲ来シ水流ハ地域内ニ乱入シテ着手中ノ掘削工事ニ不測ノ危害ヲ及ボス恐ガアルヲ以て、一時之レヲ締切リ堰堤ヲ設ケテ平時ハ流水ヲ遮断スルコトトシ堰堤築造ノタメ混凝土単床六、六六二坪ヲ施工セリ七月ヨリ八月ニ渉リ殆ンド全力ヲ集中シテ之レガ施行ニ当リ八月中旬之レヲ竣工セリ」この復旧には石狩川全工場から人夫が動員されました。

夕張川の記録に「七月二十八日ヨリ八月九日マデ美登位締切護岸工事ノ為人夫全員ヲ派遣シ、一時作業ヲ中止シ……」とあるように、全工場の応援を得て突貫工事で進められました。こうしたトラブルはありましたが施工技術のレベル向上により順調に工事は進みました。

先づ工事の能率を左右する天候にも恵まれエキスカ、機関車の実動時間も長い、その上翌年の作業の都合を考え調子のいい二号機と八号機を冬期間も運転しました。

又一部機械掘削の困難なる箇所は、人力掘削を施行し積雪期は馬橇を使用する等、雪国らしい配慮も加え大規模機械工事の中で色々工夫を凝らし冬期間も休むことなく、人力、馬力をうまく組合せて能率化を図り、期間短縮に苦心が払われていることがわかります。

一方関連して冬期間に五号エキスカ九尺堀りを、十三尺堀りに自力をもって改造しました。

即ち継足をしバケット三個を増すものでした。

大正十五年度

大正十五年この年は〝昭和号〟を迎えるための準備の年でした。

新水路の仕上げ、新水路右岸、左岸及び美登位地区での掘削土砂拾場の堤防作り等多忙を極めましたが年末迄には基線から下流部中水敷全幅四四〇mの陸上掘削が完了しました。

この年十二月二十五日天皇崩御、年号は昭和となりました。

昭和二年以降

生振新水路九線北四号取付に待望の新鋭ポンプ浚渫昭和号が四角いゴツゴツした男性的な姿に対照的なあわい白煙をはいていたのが印象的でした。そして六月から浚渫にかかりました。

昭和号は横浜ドック（株）製で、建造費は四二万六千円で、規格

は長さ三十三・五m、巾十・三m、深さ三m、排水トン数五二〇トン、主エンジンは一、二〇〇馬力の電動機で、この電動機はボイラーを炊きスチームタービンに直結する発動機によって発動機を動かすようになっていました。

「当時の電力事情から自家発電の方が便利だった」からでこの頃の記録によりますと「昭和号で使う一トン十四円の当時としては最高の石炭を炊いても蒸気の上がりが悪く、そのために十二時間の勤務時間を八名の火夫が交代でボイラーを炊いても設計の負荷がかかると蒸気圧が下りタービンの回転が落ちてポンプの能率が低下する」と回想しています。後昭和六年、当別太新水路の浚渫から発電機を廃止し、北海水力より直接受電することになりました。当然昭和号の電力設備を改造しなければならなくなりましたが、このことにより生振、美登位の治水関係は勿論、付近の民家ことごとく点燈するよう配線されました。

ともあれ昭和号の登場により以後順調に浚渫が進み昭和五年六月には第二締切堤直下に達しました。この為六月の末から第二締切堤のコンクリートブロック単床工の取り除き作業にかかっていました。ところが八月二十一日、またもや住民の第一締切堤破壊という妨害事件が起きました。当時の記録によりますと、「八月中旬から降雨があり美登位で水位三・二mとなり、第一締切堤は越流を始めましたが沿岸氾濫にはまだ一m以上の余裕がありました。が、八月二十一日朝茨戸方面から長船に乗込んだ沿岸住民約八十名がショベル、唐鍬を持ち第一締め切り堤付近に停船し締切堤の破壊に取りかかりましたが破壊作業は成功せず引き揚げました。その後再び来襲し破壊箇所を変更して遂に修理し得ないまでに破壊されました。」こうした住民の妨害に対しても実力行動に出ず、ひたすら忍耐をもって見守らねばならなかった当事者の心境は悲痛なものであったと考えられます。

このような予想だにしなかった第一締切堤の破壊は、被覆ブロックを撤去した第二堤を簡単に流出し、下流の損害と作業の困難はとてもこのまま作業を継続し得ないまでになったので全幅遮断の水路埋立を行う完全締切を行なうこととなり、この工事は九月中旬から月末までに完了しました。

そして全力を上げて低水路の沈澱土の浚渫と護岸工の進捗に力を注ぎました。

施工護岸は低水路の土質が砂質であるため粗朶単床工を下地としたコンクリートブロック単床で被覆する二重単床工でした。

前記の通り基線で完全遮断して進め明けて昭和六年四月には低水路の浚渫と護岸に主力を注ぎ基線から上流の低水路の浚渫にかかるのを目前にして下旬から降り出した雨で増水し、美登位で水位四・六七m、生振一・八七mになるに及んで付近一帯が浸水氾濫したので沿岸住民に不穏な流言がしきりに飛び、万一に備えて昭和号の避難等も用意し締切堤の警戒を怠らず前年八月の暴挙により破壊され完全遮断に踏切るには十分の決意のもとで断行した経緯から警戒も亦今迄と異り厳重なものでした。

沿岸住民は今回は直接行動に出ることなく、大挙して道庁へ筵旗

を押立て正面に座り込み長官池田秀雄に陳情しました。

協議の結果「五月十八日締切堤を撤去も止むなし、」と決定し河合所長から五月十七日夜電話でこの指示が伝達されました。

昭和六年五月十八日午后四時を期して通水するため浚渫は二km下流の北四号新水路入口に護岸材料その他作業船もそれぞれ下流に避難させ、また石狩町へは河岸警戒の通達を行い午後二時迄には一切の準備を整え、そして午後四時締切を撤去し通水を行ないました。この時の水位は美登位四・三九m、生振一・九九mで落差は二・四〇mでした。

その時の情景を工場主任山崎一明さんは次のように述懐しています。

「流水は所謂潰河の勢をもって新水路へ奔流し、上流の水位は刻々減退すると共に新水路の水位は見る見る上昇し、中水敷内は一面泥河と化けました。その泥河の中で昭和号が流れにもまれながらときどき汽笛を鳴らしていたのが、今でも思い出される。」と、この流水によって石狩川付迄両岸の氾濫水は一夜で河道に復帰したと言います。

その後は流水しつつ基線より上流部の低水路の浚渫作業は終わりましたが、これに先立って十月四日。起工以来十四年の歳月を要した新水路掘削も竣工式を迎えることとなりました。

竣工式に於て、札幌第一治水事務所長河合治八郎氏は治水事務所職員と全従業員を前にして次のような式辞を述べています。

式　辞

生振新水路開削の工成り、本日ここに通水式を挙行するに至れり、そもそも石狩川奔流第一期治水工事の目的は、沿岸平野約二万町歩の浸水を除去し、その水害を免がれしむるは勿論荒蕪地一万町歩の開発促進を主眼とするものにして本生振新水路開削工事は延長三十町、一〇〇万余坪にのぼり、本水路の開通は在来の流路を短縮すること実に三里十八町に及び石狩川本流第一期治水工事生命の大半はここに存すると言うも敢へて過言にあらざるべし。されば官民一途その竣工の一日も速からんことを期せり、本工事は大正七年十月二日工事に着手し九年九月初めて掘削機一台を運転し、漸次工事を進め十三年度には九台の掘削機により作業するの盛況を呈せり、越えて昭和二年六月本邦において最新式を誇る浚渫船昭和号の就業するありて低水路の浚渫に手を染め工事に一新紀元を画せり翌三年度よりは昭和号の昼夜兼行の作業により、左岸護岸工事に着手し同年この延長一、〇一八間を竣ると共に右岸護岸工事を開始せり。

これらの諸工事は爾来鋭意続行して今日に及び今や全土量を開削して流水は新水路を直通するに至れり、顧みれば起工以来寒暑を空すること十有余年この間出水に悩まされ、或いは風雪とたたかい辛酸を嘗めて偏に工事の進捗に努力を費すこと三〇〇余万円遂に今日の成果を収め従業員一同と共に、その喜びを頒つことを得たるはこれ本官の最も欣幸とするところなり。

多年春夏の洪水ごとに夙夜不安の念に駆られし沿岸住民も意を

安じて、その業に従事し地方開発に専念するを得たるに至りたることは本道拓殖上寔に同慶の至りと謂うべし。

然りといえども本川治水工事は、なほ今後の施設に俟つべきもの多く各位の努力を期待すること尠しとせず、邦家のため一層奮励あらんことを一言以って式辞とす。

昭和六年十月四日

札幌第一治水事務所長

北海道庁技師　河合治八郎

この式辞に起工以来の辛酸と、治水工事の一新紀元を画した喜びが凝縮されているのを知ることができます。

十月末こうして生振捷水路は浚渫工事も終り、昭和号は上流の当別新水路へ移動し、越年しました。

翌春浚渫を続行し、当別新水路も昭和八年五月通水しました。

続いて対雁新水路も同年八月通水しました。こうして篠津生振間五新水路の一貫した通水は完了しました。

しかし工事はこれで終わったわけではなくなお続きました。

昭和九年の事業報文に「新水路ハ前年度中開通ヲ遂ゲタルガ故、残程工事中主要ナル堤防盛土及ビ護岸工事ヲ極力進メ……」と、あるように新水路開通後は引続き堤防工事が進められています。同報文の中、生振分として次の報告があります。「生振ニテハ掘削機一台ヲ運転シテ前年度ノ残程タル美登位前面旧川締切堤防ニ接続セル左岸堤防ノ盛土ヲ完了シ……」更に「昭和十一年生振村地内左岸堤防工事ハ昭和九年度迄ニテ一時中止セシガ本年度秋季ニ入リ再ビ盛土ヲ開始シ、更ニ当別太地内左岸堤防ニ接続スルタメ旧川締切堤防盛土工ノ準備ヲ整ヘタリ、生振左岸堤防ノ仕上ハ又秋季ニ入リ施工シ冬季中ヲ通シテコレヲ行ヒ、全部ヲ完了スルヲ得タリ」と、その施工状況が記録されています。こうして工事残程は主として旧川締切堤防となりました。

次いで昭和十二年の事業報文の中、生振分を拾ってみると「生振ニテハ篠路村字山口ヨリ当別太ニ至ル旧川締切堤防盛土ノ準備ヲ整ヘ春期増水期ニ於テ浚渫船石狩号ニヨリ底部埋立ヲ施行シ、次イデ上部ノ盛土ヲナシ両岸天然地盤迄天端ノ一部ヲ盛立テタリ」この文中締切堤防の施工方法は、浚渫船と艀運搬によるもので、陸上施工法と異りすべて土運船によるものでした。

当時の対雁治水事務所長黒沢文雄さん（昭和四年より八年迄生振治水事務所に出張員として勤務）の述懐によりますと、「或る代議士が現場を視察に来て〝永年の歳月と巨額の国費を費やしながら、この点々とした島のような堤防は何の役に立つのか〟と一喝して帰った」と、まさに点々とした島のような堤防であったのです。それを連続させるための工事が営々として続きました。

そして昭和十三年度の事業報文中の生振分には、前年度と同じようなことが記されています。即ち「生振ニテハ篠路村字山口ヨリ当別左太ニ至ル旧川締切盛土ノ一部ヲ施工セリ」と、昭和十四年度報文には「エキスカト付属品ハ新十津川災害防止工事ニ転用サレ、本流堤防工事ハ、僅カ篠路村字山口ヨリ当別町当別太ニ至ル旧川締切

堤防盛土ノ一部ヲ残スノミ」となった。ここに本流下流築堤は概成を見たのである。

かくして、昭和十四年三月を以って生振治水工場は廃止となりました。時の工場主任は九代目の山本昱全さんでした。

付記　（一）　岡崎文吉博士のこと

〝石狩川治水計画調査報文〟或いは〝岡崎式ブロック単床〟で知られる岡崎文吉博士の略歴を紹介します。

岡崎文吉、旧岡山藩士〝寿〟の長男で、明治五年十一月十五日岡山に生る。幼にして父母と共に札幌郡下手稲村（三十四番地）に移住す。（注、父は先に来道、文吉の来道は農学校入学時、母の来道は同卒業時以降）明治二十年十一月札幌農学校工学科に入学し、校費生を命ぜらる。

明治二十四年七月卒業、工学士となる。これよりただちに同校研究生を命ぜられ、ついで同校雇教員となる。

明治二十六年五月札幌農学校助教授に任じ、六月北海道庁技手を兼任す。後、札幌農学校助教授を免ぜられ、二十九年七月北海道庁技師に進み、従七位に叙せられ土木部勤務となる。

以来、各港調査委員、北海道治水調査委員となる。明治三十二年十二月、命により内務省直轄河川の調査をなす。明治三十五年一月更に、道庁より治水鉄道橋梁に関する調査を嘱託せられて、欧州各国へ出張。この年十二月帰朝して、土木部監査課長となる。

明治三十七年三月土木部国費工事課長、四十一年高等官三等に進み、後、函館築港事務所長、石狩川治水事務所長を兼任す。

大正元年十二月勲五等に叙し、瑞宝章を授けられ同三年六月正六位に叙せらる、この間に石狩川の資料を纏め東京大学工学部に論文を提出、これにより大正三年七月工学博士の学位を受く、大正六年沖野内務技監が現地視察に来道の折、新水路の工法で意見が食い違いました。いわゆる〝石狩川改修論争〟であります。

この時の対立の模様については記録がないようです。翌七年には内務省土木局へ転出し代って名井勅任技師が来道しています。以後の経歴については記録が見当らず、判りませんが、〝石狩川改修論争〟を境に明暗を分けたことは事実のようであります。

以後、筆者の憶測ですが東京に転勤になった直後に退職していると思われます。

退職後、内務省の知己の計らいで、内務省の依頼により、水力発電の現況調査を目的とした欧米視察に出掛けています。その視察の結果を取纏め大正九年三月丸善から「輓近の水力発電気」が刊行されました。同じく大正九年、請われて、支那奉天省営口牛荘上游遼河工程局技師長に就任、遼河治水の総師となりました。昭和八年博士は遼河工程司の仕事を後進に譲り、満鉄経済調査会の顧問となり、鴨緑江の電源地点の調査に専念するが健康を損ね、帰国して絶対安静の日々が三年続いた。「博士は何時の頃からか岡崎国際技師と呼ばれ、正四位勲三等（旭日章）に叙せられました。」（墓碑に刻まれたものより集録）。昭和二〇年没。

付記　（二）　名井（みょうい）勅任技師のこと

大正十四年春期出水時トラブルの際の名井、岡田協定は治水工事関係者にとり余りにも有名なできごとでありますので、名井勅任技師の略歴を紹介致します。

名は九介（きゅうすけ）、明治二年山口県吉敷郡吉敷村（現在の山口市内）の名家に生まれ、明治二十五年七月帝国大学工学部土木工学科を卒業、時に二十四才、卒業後内務省土木局河川調査雇、月奉五十円。第二区土木監督勤務、その後　九頭竜川改修工事、木曽川改修工事に従事、明治四十一年三月より四十二年三月迄欧米留学、明治四十四年から利根川改修工事に従事、大正七年一月北海道庁土木部勅任技師としてきました。以後昭和二年六月十四日北海道庁を退職するまで、北海道の土木事業全般を掌握し拓殖事業の進展に尽力されました。この間大正九年一月十五日から同十年四月十三日迄石狩川治水事務所長を兼務、（第三代目の所長と云うことになります。）昭和二年脳出血で倒れ、生活に大体支障なき迄に回復せるも同年六月退官、同七月特旨を以て位一級を進められ高等官一等、正三位勲三等を以て官界を去られました。

退官後、昭和四年六月、東京高等工学校長に迎えられ、昭和八年六月二十八日工学博士の称号を受く、爾来、昭和十九年死去する迄校長或いは名誉校長として関係されました。

名井勅任技師が北海道庁にこられた当時の経緯を真田秀吉は名井九介翁記念録にこう述べている。「名井さんが北海道に行かれた当時、道庁には土木技師は三、四〇名もいましたが、色々の課に分かれておって、まとまりがつかない、そこで長官俵孫一は内務省の沖野技監の所にやって来て〝一つ相当な人を下さい〟と申込みました。その結果名井さん（内務省東京土木出張所工務部長）が行かれたのです。初め〝俺はいやだ〟と言っておられたそうです。そのままこちらにいれば所長にもなれるという位置におられたからである。沖野技監の話は実に命令的で止むなく北海道に赴任されたわけであります。

沖野さんも気の毒に思われたのでしょう秘蔵の金時計を大きな鎖と共に贈られました。よく名井さんも金時計を貰ったと当時の事を語っておられましたが、内務省にも大変必要な人であったにも拘らず……こうして名井九介勅任技師は赴任されました。

時に大正七年一月二十八日であった。当時北海道では石狩川の治水工事が始まろうとしている時だった。

この工事を成功させる為に、内務省の直轄工事の経験者の中から有泉技師（内務省信濃川改修事務所より赴任、二代目事務所長となる）河合技師（内務省新潟土木出張所より赴任四代目事務所長となる）機械の愛甲技師（大正八年事務所長心得、初代江別機械工場主任）などを呼んでいます。」

また、杉森文彦によると「当時、道庁には勅任官として、長官、総務部長、土木部長、と土木部勅任技術官の四名だけで、而も只一人の勅任技師官であり、内地府県にはまだ勅任技師の制度がなかったので北海道の技術家は大いにこれを誇りとしたものでした。」

付記（三）治水専用私設電話

治水専用電話が大正八年敷設されたことも、路線も本文に書きましたので省略し、当時の電話がどんなものであったかについて少し記してみますと、先づ、実によく働いた電話であったと云うことで

す。

事業の指揮命令、機材の修理並びに運搬の打合せ、洪水の警報等業務上のことから、従業員及び家族の負傷疾病の緊急連絡から、米、味噌の購品の依頼迄、果ては長期出張の御主人に対する若き奥さんの切なる愛情の訴えに至るまで幾多の哀歓を乗せて線のある限り鳴り渡りました。

優秀な技術陣を揃え莫大な経費をかけているＮＴＴの施設でさえ故障の生ずるもの、それを如何に仮設とはいい乍ら僅かな予算のため足場丸太を立て銅の抵抗の七倍もある鉄の裸線で、しかも柱に対する荷重の関係から細い線が使われていました。

従って雑音は普通で、故障も驚くにいたらずと云う代物でした。でも肝心な用は足りました。構造は旧式の磁石式で各事務所には呼出しの符号があり自分のところが呼ばれていると知ったら受話器をはずすというものです。それで呼出のベルはとまります。たとえば本所（治水事務所をこう呼んでいました）が、長音一本なら右横についたハンドルをジーと廻す間をおいて又、ジーとでるまで繰返す、これが本所の電話だけでなく線の繋っている各事務所のベルが一斉に鳴ると云うものでした。だから雑音は普通と云う訳です。

でもこの電話は治水の人々にとって、かけがいのないものでした。

付記（四）香取神社の分神の奉載と殉職碑

「石狩川治水工事の拡大進展と工事の永続性に鑑み人心の安定と工事の安全を祈願するため神社の必要が認められ造営することになりました。」大正十一年のことであります。

そこで我が国の治水工事の元締とも言うべき内務省土木局に問い合わせたところ「利根川および荒川等の改修工事の場合には、河川工事に最も縁の深い香取神社の御魂を奉戴した」との返事がありました。関係者の検討の結果、「至当なりと考えられ同神社と交渉、了解を得、御分神を遷宮することになりました。」

場所は生振地内新水路右岸丘陵（紅葉山砂丘の一部）の聖地（一〇線北一号）生振治水事務所と向い合うところが選ばれました。

「そして同年四月、所員漆崎民之助、技手大谷秋雄、技手青村敬二（生振治水事務所担当員）が内務省東京第一、同第二土木出張所及び香取神社所在地にそれぞれ派遣され、御分神を奉戴し、前記場所に併せて札幌神社の御分神を合祠し、全石狩川本支流の守護神と定まったのである」。

例祭日は九月一日ときめられ、同時にこの日を石狩川治水工事の記念日とし、毎年厳粛かつ盛大に式典が行なわれましたが、翌年のこの日関東大震災があり、この日を避けて七月一日に変更になりました。

また大正十四年九月工事のため殉職された方々の霊を慰め再び犠牲を繰り返さないよう祈願するため同境内に慰霊碑が建立されました。四角い縦四・五ｍもある　碑と云うより柱と言った方が適当な程大きなもので、それが西を向き、あたかも新川を見守っているかに見えました。

昭和六年新水路の通水により、該地が対岸となり祭典参拝等に不

便になりましたので美登位左岸堤防地（十線南一号）に新らしく築土遷宮されました。これに伴い碑を新らしく製作し同境内に建立されました。

この度のものは自然石（濃昼から運んだ）もので、石碑らしい石碑でした。

尚題字は時の勅任技師伊藤長右衛門さんの筆によるものでした。

慰霊祭は神社祭典と併せ行なわれていましたが、その後工事の主体である生振直通水路の完成により工事も各所に分散され御神体は石狩八幡神社に遷され今日に至っています。

付記（五）石狩運河と運河橋

通称石狩運河はシビシビ運河とも呼ばれましたが、正式の呼称は、石狩川旧川連絡新水路と言います。

この下流堤防に架設された運河橋が一般に親しまれている名でありますから私も石狩運河として稿を進めます。

石狩運河は生振新水路通水によって旧川の内水を排除するため、石狩町シビシビと同矢臼場間を低地を選び新水路によって連絡させるもので、延長約一・五㎞、敷巾二十七ｍ、常水位以下約二・三ｍに浚渫したものであります。

この開削工事は昭和九年八月七日美登位工場から廻航した石狩号によって翌八日から着工されました。以下昭和九年度の生振治水工場工事報文によりますと、「運河ハ砂混リノ粘土質ニシテ申分ナキ土質ナリシモ巾狭キ為石狩号ノ移動意ノ如クナラズ比較的能率ニ好影響ヲ与エザリキ。土捨場ハ生振付近旧河道締切堤防箇所ニシテ浚渫個所ヨリ遠距離ナリシ為最初発動機船旭丸一艘、土運船（鉄製）二艘ニテ行ヒシガ石狩号ノ船待時間非常ニ長ク浚渫曳船ノ能率平行セザリシ為八月一七日発動機船弁天丸ノ応援ヲ得、土運船三艘ヲ用ヒ工事ヲ進メタリ、以後順調ニ運転ヲ継続シ一〇月二一日迄ニテ捨場所要ノ高サニ達セシ故、以後旧川運河取入口付近旧河川下流ノ深所ニ投土セリ」。

こうして開削作業は十一月三十日迄続けられ新水路の通水をみました。

この間、運河橋の橋台の基礎工事が進められていました。

従来石狩本町と生振村間の交通は旧川の三線渡船場を利用していましたが、この橋が完成すれば渡船によらず陸路で連絡出来ることから一日も早い完成を望まれていたものでした。この橋の特長は全熔接橋であることと架設に足場を用いなかったことだと言います。

全熔接橋は記録によりますと「本道最初の全熔接橋であって、道路橋としては田端大橋（東京）に次ぐ全国二番目のものであった」といいます。（『石狩川治水小史』山田昌による）。

ところが作業工程を調べているうち、なかなか難工事であったとは理解し得るも、橋長十六・三二ｍ、幅員五・五ｍと今で言うなら創成川に架る一小橋にも足りない橋が三年もかかった点、そのおかれた時代をつくづく考えさせられるものであります。

昭和九年運河掘削と運河橋の下部工事の大半が完了。

昭和十年度は運河橋台付近の護岸工事の施工、昭和十一年度に至

り漸く一部請負を以って六月二十二日に着手し八月十九日施行竣功、後型枠除去等の諸作業終了し、九月八日茲に全く竣功す。

支那事変の始まる前年でした。

付記（六）**道路兼用締切堤防と観音橋**

昭和十年度、石狩川茨戸太と生振を結ぶ通称観音橋に接続する逆水防止のため、道路兼用の締切堤防が施工されています。

工事報文によりますと、「本年度新タニ起工、浚渫船石狩号ニテ河道内ノ寄州ヨリ土砂ヲ掘上ゲ土運船ニテ運搬水面下一m迄埋立テ、其レヨリ上部ハ人力ニ依リ付近ノ土取場ヨリ採取運搬シ本年度ニ於テ八、六〇二㎥ヲ完成セリ」と、このように、きわめて合理的な施工法がとられています。

次いで昭和十一年度通称観音橋に着工、逆水堤防と共に竣工を見ています。「篠路村字茨戸太ヨリ旧石狩川ヲ横断シ対岸石狩町字生振ニ至ル延長五〇〇mノ締切堤防工事ハ前年度ニ継続シ付近土取場ヨリ専ラ人力ヲ用ヒ採取運搬シ二二、四七六㎥ヲ完了セリ　前記ノ石狩川旧河道ノ貯留水ヲ排出セシムル為締切堤防ヲ横断シ、鉄筋混凝土樋門ヲ設ケ、上部ニハT桁橋ヲ架設シテ交通ノ便ニ供セントスルモノニシテ年度開始ト共ニ起工一一月末日竣功セリ」

観音橋橋名由来

山田昌によると「石狩川旧河道生振逆水堤防盛土工事の左岸に茨戸樋門があります。その開水路部分に架けられたのが本橋であります。全長七m造成幅員七・九m、鉄筋コンクリートT桁橋であり、」先の運河橋より更に小さい橋であります。

「生振捷水路によって生じた旧河川を茨戸において締切り、美登位、茨戸間を湖水化し、夏はボートレース場、冬は大スケートリンクとして利用、四季を通じての一大遊園地を造成するとともに、当時、霊顕あらたかな生振観音様に参詣するという一石二鳥の工事であった。」と関係誌に記されています。しかし、時代が時代だったので、はたしてどうであったか本音はともあれ、何に彼につけて弾圧の厳しかったことを思う時、精神的にこれだけゆとりをもった表現（理由書）が許されたのであろうか、ともあれ予算を獲得し工事は出来たのであります。そして橋名板に観音橋と残されたのであります。

今なら、国も自治体も、企業も、我れ先にと名乗を上げ一大リゾート地開発に激しい競争をするところでしょう。現に今は陸にはテルメ、茨戸湖はボート競争場として着々整備が進んでいます。

然し観音橋が出来た頃は満州事変が漸く一段落し、軍部がいよいよ強くなる時期です。拓殖費と軍備の綱引が大変なことを思えば、やっぱり生神様生振観音の御利益を希ってのものであろうか。

生振治水工事　こぼれ話（一）**燕のコロニー**

その頃は燕のことをよく知りませんので学名で何んと言うのか判りませんが、〝岩燕〟そう呼んでいました。崖に横穴を掘って棲んでいたのでこう名付けたものと思います。

春ともなると群れをなして飛来して営巣していたのです。場所は治水工事の石狩川右岸工事取付部地先（八線北三号）該地区付近五線北三号無名川より六戸付近迄の六、〇〇〇ｍは本流の浸食が強く五ｍ位の崖になっていました。

土質は砂で、砂岩と云う程のものではありませんが圧縮された割合堅い土質だったので、燕の嘴で穴を掘り営巣するには格好の場所だったのでしょう。就中、七線北三号地先付近から六戸地先位の約三、五〇〇ｍが彼等のコロニー地区であり、八線北三号地先付近が最も営巣が多かったように思います。

それが八線北三号から九線北四号位までをエキスカにより掘られてしまったのですから燕にとっては大変な環境破壊であり災難だった訳です。掘られたところに営巣していた燕は次の年からどこに塒を得たか昭和十一年頃迄はそれでも春になると飛来営巣していました。

小麦が実る頃が一番活動が活発で、曇りの日は黄色く熟れた小麦すれすれに、晴れた日は日中高く矢のように飛廻っていました。

それ以後は段々少くなり此の頃では殆ど見かけなくなりました。

この稿を起こすに当たり〝渡鳥〟の本を見てみましたら学名〝岩燕〟はいるんですが習性が違うんです。岩燕の営巣は崖又は街中の建物の壁面で、しかも屋根というか庇が出て直角になるような壁面を撰び泥を主材料に、羽毛、枯草等で、巣造りすると書いてあり、家の軒先に営巣している写真が載っていました。

だが生振のコロニーは確かに横穴でした。それで調べてみました。そして判りました。

〝ショウドウツバメ〟北海道の川の土質の崖でその集団営巣がみられる。上面褐色で胸に褐色の帯があり小型の燕である。夏鳥。

私達の子供の頃呼んでいた岩燕は〝ショウドウツバメ〟であったのです。

生振にこうした燕のコロニーがあったと言う事実と、それが治水工事のために無残にも破壊されたと言うことを書き残しておきたかったのです。

生振治水工事　こぼれ話（二）潜水夫の昼寝

時は昭和四、五年だったと思います。

治水では昭和号が防風林地先付近を掘削していた頃で、新川の護岸工事も進み北一号あたりで作業していた。護岸工事はコンクリートブロック単床工で川べりに舟を浮かべ櫓を組み、ブロックを繋ぎ、水中作業班が濃昼から運搬してきた砕石を均し、その上に柳粗朶を並べ、その上へ繋ぎ合せたブロックを櫓から辷らせて被せると云うものであった。水中作業班は大抵五人一組で、手押消防ポンプを小型化したようなポンプを固定し、吸気、排気の繰返しでゆっくり、カッタン、コットン二人で潜水夫に空気を送る役、一人は命綱を持ち、色々と綱で舟上と水中との意志伝達をする役、一人は舟が流されないで常に潜水夫の上に位置するよう艪を漕いでいる役で五人の呼吸が合ないと人命にかかわることもあり得ることから他所では夫婦、親子、兄弟等身内で組むことが多いと言う、だが治水ではそれ

が出来なかった。それは労務者が個々で来ていたから、ところが或る日変事が起った。そう思った。舟上では騒ぎだした、どうも水中の様子がおかしい。今まで大体規則正しく空気調節弁からのブクブク、ブクブクと云う泡が出ていたのにそれが途切れたのだ、舟上の四人は心配になってきた、事故か？大変だ、と。それで櫓の上で監督していた常夫に声を掛ける。常夫は担当員に知らせるよう措置して舟に急ぎ、引上げ指示する。それ引上げろと、引上げにかかった、ビックリしたのは潜水夫の方、命綱を持った相棒から合図なしに引上げられたのだから……、舟では普通でないそれ事故かと、勿論引上げる前に命綱を引いて合図をしている。応答がないので事故かと急いで引上げたもの。水面に浮いた潜水夫は取付けの梯子に自力で上りヘルメットを取り何事だと言う。訳を話したら納得したが彼の言ったことはこうだ。〝疲れてきた、それに水かぬるかった、ついうつらうつらと居寝むりしてしまった〟と人騒がせなこの件も〝暢気な奴だ〟〝豪傑だ〟〝なに飲み疲れだろう……〟。

かくして騒ぎは笑いのうちに治まった。が以後は随分と気をつけるようになったと言う。

生振治水工事　こぼれ話（三）第二締切堤（内緒の陸橋）

場所は基線の上流二十ｍで延長約三〇〇ｍ天端幅五・五ｍの締切堤はコンクリート、ブロック単床で覆われ、渇水期には〝車場通行止め〟の立札はあっても監視が居る訳でなく、付近に人無きことをたしかめては通い作の人や、（陸続きのとき太美や川下に農地を所有していた人がいた）太美、獅子内、当別に用事のある人、（中には及川と言う医者のところへ行く人も）も、この堰堤を利用していました。がこの頃の馬車は保道車でなく金輪の馬車ですからカタコト、カトコト、馬も蹄鉄を履いていますからブロックを割ると云う心配もあった訳で河川監視にでも見つかったら叱られる位で済まないのですが捉まれたと言うことを聞いたことがありません。

橋代りに渡る人は、新川さえ出来なければ道路としての基線を通れたんだから……と罪意識は全々なかったようです。

増水越流時以外は人が歩いて渡る分には何も言われませんでした。だから水涸れの時期は子供達にとって格好の遊場となっていたのです。

水泳。堰堤の下流は越流の時、堀られて深いので上級生が、上流は下級生が、それでもところどころに深みがあるので、泳ぎの達者なものが瀬踏みをして、此処は危険、この辺は大丈夫と区域を決めて遊ばせていました。

蟹獲り。堰堤の下手で秋、唐黍の稔る頃がよく獲れました。大き目の手籠に唐黍を入れ小石を重りに水中に沈めておくと、面白いように唐黍にかじりついた蟹を獲ることが出来ました。

魚釣り。今のように立派な釣具で釣りをする子はいませんでした。皆自分で作る、買うのは釣針とテグス、おもり、浮、ところが買うのは釣針とおもりだけと云う子もいました。竿は根曲がり竹に凧糸、おもりをつけ、針を結び、浮は枯柳をけずって使う、餌はもっぱら蚯蚓、これで鮒、鯉、一番釣れたのはゴタッペと云う頭の大きい体

長十㎝位（ハゼ科の魚か）結構楽しめたものです。
こうして楽しんでいる間にも、ピンク色をした八ッ目鰻の子が単床石（ブロックのこと）に一ぱいくっついているのが見られたものです。

生振治水工事　こぼれ話（四）**こまわり**

細割（こまかく割る）か
小間割（小さな室のように割る）か

或いは建築用語の乗木と乗木との間、又は根太と根太との間が、フイルムの一コマ、一コマのように割るか、語源は判りませんが、今ならノルマと云うのでしょうか、一日分としての割当量のことなんです。仕事の進捗を早めようとする時、労務者の競争心を煽るこの方法を治水ではよく使いました。

この方法は機械作業でなく人力作業の時、特に効果があったようです。

例えば人力跳ねつけによる排水掘削の時等、一日の作業量が○立方米のとき、断面と深さで間口が計算できるのでこれを一コマとして割当てる、極端な話が半日で仕上げても一日分支払われることは当然です。

若い労務者は九時の休みも休まず、お昼も食事をしたら直ぐでかける、三時の休みもなく堀る、腕達者な若いものは大体三時頃上りになるのです。だがこれには多分に運、不運があって、サラサラした砂とか、埋木があったりするとどんなに腕達者でも競争になりません、それでも同僚に負けたくない一心で、堀る、跳ねつける、割当てられた量だから途中で棄権はできない。必ずやり遂げなければなりません。だから治水としては決りのつくいい方法だったんです。

割当を仕上げた労務者は常夫に見てもらいＯＫを取るとサァ……これからが又競争現場から飯場迄走って帰る、腰の弁当箱をガラガラ鳴らしながら……何故こんなことをするかと言いますと早く帰ってくると云うことは腕達者だと評価され以後の単価（日給）が上るからでした。

組労務者の日給は組帳場と治水との交渉で決められていたのです。

生振治水工事　こぼれ話（五）**工事用地買収価格と労務賃金**

大正七年の事業報文には「四月八日登記手続未了三十二名ヲ残シタ外、四二三町三反余　此ノ価格一七六、八五四円、一反歩平均三十八円十四銭余ニシテ土地買収ヲ結了セリ」また家屋移転及物件補償も同時におこなわれた。「当所評価ニ依リ是亦各所有者ノ協定ヲ得テ全部支払ヲ了セリ、関係者三十八名、此金一一、一二三円余一名平均二九二円余ニ当ル、而シテ生振美登位間ハ年度末ニ全部移転ヲ終リ、美登位上流ハ、工事実施ニ支障ナキ限リ是レガ実行延期ヲ許シタリ」

更に大正八年度「生振美登位間水路掘削ニ伴フ土砂ノ処分上是レガ投棄個所トシテ水路用地ニ沿ヒ合計三十六町三反余歩、此ノ価格一四、四七六円余　一反平均三十九円三十一銭余ニテ買収セルノ外、前年度登記手続未了ノ為買収ニ至ラザリシ関係者二名分一町七反余

ヲ合セ買収シ、用地買収全部ヲ結了セリ」

大正十三年度（四／一～十一／三十）

出役人夫　組夫　七〇九名　七九三名

単独　八四名

出役人夫延人員　八一、七四八名

出役人夫延総賃金　一七〇、五九三円三七銭

出役人夫一名当平均賃金　二円〇八銭六厘

（十二／一～三／三十一）

出役人夫数　単独　一六一名

出役延人員　〃　七、五五七名

出役総賃金　〃　九、五五四円七九銭

出役人夫一名当平均賃金　一円四五銭五厘

出役人夫数　馬持　二八名

出役延人員　七八七名

出役総賃金　二、七四二円八〇銭

出役人夫一名当平均賃金　三円四八銭五厘

引用参考文献

「石狩川治水計画調査報文」岡崎文吉

「石狩川治水小史」　石狩川治水事務所

「石狩川治水史」　北海道開発協会

「石狩川」　国土開発調査会

「治水」　伊藤兼平　夕張川切替三十年記念小説出版協会

「石狩川流域開発秘史」　富樫伊右衛門

「北海道史年譜」　橋本堯尚

「北海道移民史」　北海道庁拓殖部

「拓殖後日譚」　橋本東三

「名井九介翁記念録」

一／五〇、〇〇〇地形図　明治二十九年製版　陸地測量部

〃　大正五年測図　〃

〃　大正五年測図　昭和十年修正参謀本部

〃　〃　昭和六十二年修正国土地理院

いしかり暦

平成三年七月一日　印刷
平成三年七月六日　発行
発行者　石狩町郷土研究会
石狩町花川北四条二丁目一五〇
山口　福司方